モンスターハンター外伝

書男

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

まだハンターという職業がない時代。辺境の地に住う人々は、常にモンスターの力に畏怖し、それに押さえつけられながら生きていた。

アルコリス地方のとある小さな村に住む竜人族の青年「アンタ」。彼はモンスターたちに強い憧れを抱き、いつか自分もモンスターのように自然を悠々と駆け巡ることを夢見ていた。

ある日、同じ夢を持つモンスター好きの友人「サディ」が見つけた一冊の古本と、森で起きた異変をきっかけに、彼らは危険な大自然へと飛び込むことを決意する。

これは、小さな村の若者たちが描いた「モンスターハンター」誕生の物語。

目次

目覚め ―― 1
青き山賊 ―― 13
青き山賊② ―― 27
猪突猛進 ―― 41
集結 ―― 56
対決！ドスランポス ―― 69
黒き凶風は突然に ―― 85
電竜雷襲 ―― 97

目覚め

桜の季節が終わり、風の匂いが変わる頃。俺は照りつける陽光に目を細めながら、どこまでも広がる大空を見渡していた。ぐるぐる見回しすぎて、いつの間にか屋根に寝そべっていると下から控え目な男の声がした。

「やあアンタ。今日は見つけられたかい。」

起き上がって屋根の下を覗くと、一人の少年が眩しそうにこちらを見上げていた。

「サディじゃないか。いいや、今日も竜みたいな雲ばっかりだよ。」

そういうと彼は適当な相槌を打って、見せたいものがあるんだと言ってきた。彼はそこそこな厚さの一冊の本を抱えていた。普段はこういうとき彼を屋根上に引っ張って一緒に空を見上げるのだが、今日は俺の方から屋根を降りることになった。

見せたいものはいったいなんだとサディに訊ねると、彼はあーだこーだと焦らしながらある場所に案内した。着いたのは小さな小屋の前だった。

「おーいアーミカ。見せたいものがあるんだ。出ておいでよ。」

サディは木の扉を人差し指でコンコンと叩いて言った。

「……」

返事が無い。もう一度呼びかけてノックしてみるが、これも反応がない。早くサディの持っている本が早く見たくて仕方なかった俺は、扉をドンドンと何度も叩いた。かなりうるさめに叩いたつもりだったが、なんとそれでも無反応だった。するとサディが俺を止め、扉に向かって囁き始めた。

「新しい料理を思いついたんだ。甘いデザートだよ。美味しいよぅ。」

すると中からトボトボと足音が響き、扉がゆっくりと開いた。出てきたのは黒髪で真っ白な肌の少女だった。まだ　日の光に慣れていないのか、目を窄めすぎてほぼ開いていない。

「うるさいんだけど静かにしろよ。」

まったく色気のない声で言った。メラルーの奴等が喋ったらこんな感じなんだろうな、という声である。

「ごめんねアーミカ。すこし見せたいものがあって。」

アーミカと呼ばれた彼女はサディの持つ本を人目見るなり、短い吐息を漏らしてドアを閉めようとした。すぐに俺が引き止めると「ちげーし着替えるだけだし行くし。」とめんどくさそうに言って中へ戻ってしまった。疑いを隠しきれなかった俺とサディはそのまま扉の前につったっていた。

「着替えてんだからどっかいけよ気持ちわりー！行くっつってんだろ。」

気配をすぐに察知したのか、アーミカが扉の向こうから声高に言ってきた。
「いや、嘘ついてバックレると困るからよ。」
「嘘ついてんのはどっちだ!」
アーミカの斬れ味最大のツッコミが返ってきたところで、俺たちは大笑いしながら集合場所を伝えて彼女の家を後にした。
「ごめんねアーミカ。デザートは約束する。」
サディは俺の友達で、料理がめちゃくちゃ上手な気の優しいやつだ。よく彼の家に行って料理を食わせてもらってる。アーミカもああみえて彼の料理の虜だ。
俺とサディは、お互いに同じ〝夢〟を持っていたことがキッカケで友達になった。その〝夢〟は、モンスターになることだ。昔見かけた、大空を自由に舞う飛竜。俺はあの飛竜に強い憧れを抱いたのだ。あんな大きな翼があったなら、どんなに楽しいだろう。世界のどこにでも行けるじゃないか。飛竜たちは、俺たちが一生かけても見られないような景色を、ずっと見ているに違いない。俺も大自然を闊歩する〝モンスター〟になりたい!そんな夢である。サディは俺の言っていることに何度も頷いてくれた。そんなやつは出会った数多くの人の中でこいつだけだ。
「なぁサディ。いったいなんなんだその本。」
期待でウズウズしてしょうがなかった俺は無駄だとわかっていながらも、何度もサ

ディに急かした。しかし次の瞬間。いきなり頭に鋭い痛みが走った。何事かと振り替えると、真っ黒なローブを羽織ったアーミカがいつのまにか追いついてきていた。手には彼女お手製のスリングショットを持っている。

「どーせモンスターのなんかでしょ。あとそれ、忘れ物。」

と言ってアーミカは指をさした。足元を見ると、手のひらぐらいの大きさの赤い物体が落ちていた。これは俺がはじめて森に入った時、偶然拾ったものだ。大空を舞う火竜リオレウスの鱗だと信じている。

「あぁ、悪りぃ悪りぃっておい！これ俺の宝物なんだぞ。パチンコの弾にするな。」

俺は痛みの残る後頭部を摩りながら宝物を拾って土を払い、ポケットの中にしまい込んだ。

「どーせなんて言わないでくれよアーミカ。今日はただの御伽じゃないんだ。」

サディは微笑みながら言った。やはり俺の期待した通り、本の中身はモンスターのことについてらしい。ますますテンションが上がってきた。早く見たくなった俺は、サディを無理やり引っ張って集合場所へと向かった。

たどり着いたのは、青空の下でやっているチンケな食事場だ。野性味溢れるキッチンで、この村の名物ということになっている。

「いらっしゃいませ！」

威勢のいい挨拶が飛んできた。彼女の名前はイア。村長の孫娘で、数年前から広場の隅に勝手にキッチンを作って食事場を始めた、村一番の美人で料理自慢を自負している。ぶっちゃけ村の名物を謳っているのも彼女だけである。

「なににする？ゆっくり考えて頂戴。」

ちなみにメニューは二種類である。

「じゃあ、アプトノス丼で。」

「僕もアプトノス丼お願いします。」

「あたしモス〇ーガーにする。」

二種類しかないけど意外と究極の選択だったりする。迷う人は半日ぐらい迷うとかなんとか。

「かしこまりましたぁ。アプトノス丼二つと、モス〇ーガーね！」と言ってイアがキッチンに戻って料理を始めると、サディはいよいよ本をテーブルの上に広げた。よく見ると、すごく色あせた本だった。厚く硬い紙でできた表紙の文字もまったく判別がつかない。かなり古いものであることは間違いないだろう。この本は彼の家にある書庫の奥底から発見したものらしい。これでもかなり手入れを施したのだという。

「サディ、読めるのか。」

「いや、全然わかんない。」

この本に書いてある文字はまったくもって謎だそうだ。昔サディの家に住んでいた家の持ち主ならなにかを知ってるかもしれないが、もう何年も前に家を離れているらしい。

「ただの紙切れじゃん。」

アーミカがだるそうに突っ伏して呟いた。正直、彼女の言う通りである。たしかに読めない本は紙切れも同然だ。ちょっと興醒めしかけていると、サディは本を開いて中身を見せた。そこにはびっしりと並んだ文字のほかに、大きくはっきりと描かれた絵もあった。繊細なスケッチというよりは、記号っぽい。それが、何ページも続いているのだった。

「僕、これモンスター図鑑だと思うんだ。」

サディは目を小さな子供みたいにキラキラさせて言った。

「モンスター図鑑だって?」

俺は思わず本を回転させて自分の方へ向けた。隣に座っていたアーミカが突っ伏しながら視線を本に落とした。たしかに、本のレイアウトは図鑑にすごく似ている。絵の横に名前らしきものが書かれているが、読めない。

「あんまり乱暴に扱わないでくれよ。」

サディの忠告に聞く耳は持てなかった俺はひたすらページをめくっていった。非常

に簡略化された絵だが、モンスターの特徴が詳しく表現されている。大きな角、翼、丸かったり角ばっていたり、無数のモンスターの絵が掲載されていた。

「これとか可愛いじゃん。」

アーミカが指を指した絵には翼があり、長い尻尾、大きな耳を持ったモンスターが描かれていた。

「それきっと、イャンクックじゃないかな。」

絵に目を凝らしたサディはそう言った。アーミカはいまいちピンときていない様子である。

「イャンクック？変な名前。」

アーミカは小馬鹿にしているが、こいつは行商人や旅人が恐れる飛竜の一角として名高いモンスターだ。人を見つけると奇声を上げながら追いかけて来て、大きな嘴でちょっかいを出してくるらしい。実物はかなり大きいだろう。侮ってもらっては困る。

「お前さっきからずいぶん知った口聞くけど、見たことあんの？」

アーミカの問いに俺は少し間を置いて言った。

「ないけど？」

彼女の目線が一気に冷たくなった。俺たちがモンスターについて教えると、アーミカはそう言って目を冷たくする。別にそんなのは当たり前で、大型のモンスターが襲いに

くるなんてのはほとんどない。しかしもっと奥に行ければ、あの森と丘を越えれば、いろんなモンスターと出会えるに違いないだろう。

「へー、つまり死にたいわけね。」

アーミカにはもう少し聞き上手になってほしいところである。

「またアーミカちゃんに変な話聞かせてるの?」

イアが出来上がった料理を運んできて言った。サディが慌てて本を閉じた。使い込まれた器に入った肉が、ムンムンと湯気を立てている。米粒一つも見えなくなるほど、イアはいつも俺たちには肉を増量してくれていた。

「いただきます。」

声を揃えて一斉に食べ始めた。イアは空いていたサディの隣に座り、俺たちの食べっぷりを見守りながら例の本に目をやった。

「なぁに?この本。」

イアは本を手にとって膝の上で開いた。

「昨日、昔の家主さんが使っていた書斎を漁っていたら出てきたんですよ。僕は昔のモンスター図鑑だと推測しているんです。」

難しげな顔で矯めつ眇めつするイアにサディが説明した。

「美味しい食材になるモンスターも載ってる?」

俺とサディは少しまごつきながら相槌を打った。食えるモンスターもいないことはないはずだ。この本が読めれば、この店のメニューも増える… かもしれない。

「絶対あるさ。」

自信を持って言い切った。イアはメニューが増えると大喜びしていたが、なぜだか他の二人の表情は芳しくない。サディは本の内容がまだわかっていないことを打ち明けた。

「じゃあ、おじいちゃんに相談したらいいんじゃないかしら。なにか知ってるかも。」

彼女の祖父はこの村一番の長老だ。古い時代からこの村を知る彼なら、なにか知っている可能性は高い。早々に食事を済ませ、お代をおいて村長のところへ向かった。

イアの自宅前まで来ると、中から男の話し声が聞こえた。俺は扉をドシドシと叩く。扉の上に括り付けられた鈴が乱暴に鳴った。そのまま返事も貰わないまま中に入ると、まずサシミウオの丸焼きの香ばしい香りが鼻をくすぐった。

「アンタとサディ、それにアーミカまで。今日はお客さんが多いの。どうしたんじゃ。」

長老がほっほっほと笑うと、対面していた一人の大男がアンタに向かって軽く手をあげた。

「どうしたんだ三人お揃いで。」

「フレント。お前こそなんでじいさんの家にいるんだ。」

長老と話をしていたのは、お互いにマブダチと認め合っている仲のフレントだった。大柄で陽気なやつだが、意外にもアーミカの実の兄である。

「そうだ。お前、よく外に出るだろ。ちょっと聞いてほしいことがあんだ。なぁ長老。」

長老も頷いた。なにやら村の外のことで話していたようだ。俺たちはフレントの隣に並んで座り、まず二人の話を聞いてみることにした。

「最近、ランゴスタの様子がおかしいんだ。」

フレントの一言に俺はすぐに反応した。たしかにここ数日、村の付近で多くのランゴスタを見かけるようになった。夜も村の近くを飛び回ってうるさい時が増え、ストレスを感じてしまうことも相応にあった。

「日頃村民が使う森にもよく侵入してくるようになっておる。」

少数のランゴスタの対処は昔から行ってきたので慣れてはいるものの、ここまで村を取り巻くように発生した例はない。

村長は頭を悩ませているようだが、俺は多量のランゴスタが村付近に押し寄せている原因は必ず森にあることを知っている。明日にでも森に出向いて原因を突き止めることに決めた。

「森の奥は危険じゃ。あまり深追いに急ぐな。」

「わかってる。でも村に閉じこもって耐えてばかりじゃ、なにも変わらないだろ。」

サディも乗り気だった。自然が見せる変化は、新しい発見につながる大きなチャンス。こういう時にこそ、森に繰り出すべきなのだ。フレントも大きく頷いた。戸惑う長老を差し置いて、ここに森の調査隊が発足したのだった。

「とりあえず今晩も、村の明かりを消して様子を見るとするかの。」

長老はそう呟いてスープを啜った。しゃがれた吐息を漏らしながら、ふとサディの手もとに目を向けた。

「サディ、その本は。」

長老から尋ねられた彼は思い出したように立ち上がり、長老の横に座って本を見せた。長老は顔から本を離してじっくりと本を眺めた。すると普段はほぼ開いていないように見える萎んだ目がカッと開き、記憶を掘り起こしたのか当時のことを徐に喋り出した。

「大昔、ワシがまだ子供のころこの村を訪れた竜人がこれと同じような絵が描かれた本を持っていた。よく似ているぞ。」

「本当ですか。ならこれは彼がこの村に残していったものなのでしょうか。」

サディの推測に長老は唸り声を発した。彼自身が幼い頃の記憶、はっきりしないところが多そうである。

「竜人が用いる文字で書かれておる故、内容はワシにもさっぱりじゃ。アンタ、お前さん

にはわからぬのか。」
　長老に尋ねられた俺は、すぐに首を横に振った。竜人と一口に言っても、いろんな種族がいる。俺が知らない種族だって山のようにいるだろう。当然、使う文字が異なることもあるだろう。きっとこの本は、知らない竜人族のものだ。
「竜人族が使う文字で間違いないんだな。」
　俺は長老に確認すると、長老は頷いた。だんだんと記憶が蘇ってきているのだろうか。そのまま無言でじっくりと本をめくっていく。
「そうじゃな。間違いはない。ただ、ワシにはそれ以上のことはわからない。」
　長老はそう言って静かに本を閉じ、サディに渡した。
「いえ、とても貴重な手がかりです。ありがとうございます。」
「うむ。」
　長老はまたスープを一口啜り、何も言わずに天井を仰いだ。
　大昔この地を訪れた竜人。一体何者だろう。まったく知らない言語を使う竜人なんて、存在こそすれど今まで見たことがない。どこからやってきたのだろうか。俺は彼に想いを馳せながら、炉でゆらゆらと焼かれるサシミウオを眺めていた。
「それ、食っていいぞ。」

青き山賊

　滝刺と木々を照らす太陽の光に、赤い鱗を翳した。揺らめく炎のような輝きを発するそれは、太陽と見まごうほどに美しい。屋根に寝そべってはそれを大空に重ね、舞う火竜を思い浮かべる毎日。行きたくても行けないから妄想すらはじめる、森の向こう側。

　そんな焦ったい日々を、もしかしたらサディの本が変えてくれるかもしれない。あの未知の文字たちは、俺たちに新しい世界を見せようとしているのではないか。大いなる冒険が俺を待っているのではないか。昨日の夜はそんな気がしてなかなか寝付けなかった。

　しかし目が覚めて冷静になると、ただ俺の呆れた妄想癖がひどくなっただけだと思い込んでしまう。急に昨日の自分が恥ずかしくなって、俺は宝物を懐にしまいこんだ。

「おはようアンタ。準備はできたかい。」

　いつのまにかサディが隣にいた。もちろん今日はバッチリ気合を入れてきた。

「え?それだけで行くのかい。」

　ナイフと松明、腰に巻いた採取ポーチだけの俺とは裏腹に、サディは背負う形の大きな鞄を持ってきていた。

「今日の探検はいつもより危ないだろう。もしものときのために、いろいろ準備したんだよ。」
　サディは一度鞄を下ろし、中からいろいろ取り出して見せた。薬草や水、虫かごにキノコ図鑑などと、ぎっしり詰まっている。用意周到なのは確かにいいことなのだが。
「動きにくそうだな。それ。」
　すると彼ははムッとした表情で俺を見た。
「もし怪我しちゃったらどうするんだい。」
「向こうでも拾えるだろ薬草くらい。」
「喉が乾いたら?」
「雨水でも飲めよ。」
「新しいキノコがあったら?」
「食えばいいだろ。」
　サディは額に手を当ててため息をついた。そしてゴソゴソと荷物を再び鞄に詰め始めた。
「ようお前ら。準備万端ってとこだな。」
　のしのしと足音を立ててやってきたのはフレントだ。俺とフレントは互いに拳を合わせて挨拶をした。マブダチ同士の特別な挨拶だ。彼は俺と同じように軽装だったが、

腰に鞘に入った大きな手斧を提げていた。
「フレントさん。今日はよろしくお願いしますね。あれ、アーミカは。」
サディは鞄を背負い、キョロキョロと周囲を見渡して言った。確かに、アーミカの姿はどこにもない。兄妹だし、来るなら一緒に来ると思うのだが。
「あいつならまだ寝てるんじゃないか。」
フレントは腰に手を当て、呆れた様子で言った。珍しい。早起きはあいつの数少ない得意分野の一つじゃないか。
「下手に起こすとご機嫌斜めになっちゃうからな。置いてきた。」
フレントが言うと、それなら仕方ないかとサディは微笑んだ。ひとまず探検隊が欠員を除いて揃ったということで、早速俺たちは村の外れにある森を目指して門を出た。
静かに流れる川の流れに逆らい、上流を目指していく。所狭しと身を寄せる木々が陽光を遮り、晴れている昼間でも薄暗く、いつでも涼しい。点々と差し込む光が神秘的な光景を作り出していた。
このあたりは村民にかかせない生活用の森だ。キノコや野草、水が豊富にあるおかげで生活には無くてはならない存在である。
「畜生め。今日に限ってなかなか出てこないのか。」
森を見渡していたフレントはそう呟いた。

「連日夜は火を焚いてないからな。でも少し奥に行けば、すぐに会えるぜ。」
俺は薬草を摘みながらフレントに話した。ランゴスタは比較的明るいところに集まることが多い。日没が始まっても松明などの灯りをつけないでおくと、ランゴスタは太陽を追ってあらかた森の西の方へ消えていく。ここ数日はそうやって村内への侵入は凌いではきたものの、なにかと不便だし、昼間より僅かにマシになるといった程度であった。
それからしばらく川に沿って森の奥へ奥へと進んでいくと、ぽっかりと森にはまった池を見つけた。
「お前、ここによく来るのか。」
池の畔にしゃがみ、水をすくって飲んでいるとフレントが訊いてきた。
「あぁ、前に探検してるときに見つけたんだ。魚釣りには絶好のポイントだぞ。」
ここは既に村民が使う安全な森とはかけ離れた地。俺とサディとモンスターしか知らない世界だ。驚嘆するフレントに、サディもどこか自慢げに顔を綻ばせた。
しかしすぐにシャキッとした表情になり、どこかに目を凝らしている。
「どうしたサディ。」
声をかけたのも束の間、サディは突然駆け出した。俺とフレントは慌ててその跡を追った。

「見てください。」
慌ただしく手招きをする彼の足元には、大きな黄土色の物体が転がっていた。
「ランゴスタの死骸ですね。」
転がっていたのは大きなランゴスタの頭や脚、羽だった。体液も飛び散っている。それを頼りに周囲を見てみると、同じように食い散らかされたランゴスタの死骸がいくつもあった。
「胴体の部分だけ綺麗に無くなってやがる。」
「きっと、誰かに食べられたんです。」
しゃがんでランゴスタの死骸を観察していると、地面に大きな足跡が残っているのが見えた。ケルビやモスのものとは違う、人の足よりもずっと大きいものだ。
「あぁ、足跡も残ってるな。」
「なんだってんだ一体…。」
フレントは訳が分からなそうに頭を掻いた。次の瞬間、反対側の畔の茂みが大きく揺れ、ケルビが飛び出してきた。ケルビは池に足を滑らせそうになりながらも池の畔を走った。びっくりさせやがって。と口にする間もなく、続くように飛び出してきたのは、ケルビよりも二回りほどの体格を持った、青い竜だった。
「あれはっ」

サディは思わず声高になった。

「ランポス！」

ケルビを追ってきたのか、葉や枝を散らしながら飛び出してきたランポスはそのまま池に落ちた。静寂とした森にけたたましい水飛沫と、ランポスの声が響き渡った。

俺たちはすぐに近くの木の裏に身を隠した。ランゴスタを食い散らかしたのもきっとあいつだろう。この辺でランゴスタが増えたからそれを追ってきたのだろうか。

そっと様子を伺うと、池から這い出たランポスは再びケルビを狙って走り出していた。それを察知したケルビもすぐに逃走を始めるが、なんとケルビの前に立ちはだかるように二頭のランポスが駆けつけた。彼らはケルビを囲い込み、威嚇しながら追い詰めていく。逃げ場を失ったケルビはぐるぐるとその場を回り続けている。それから間もなくして一匹のランポスに飛びかかられ、首を食いちぎられて仕留められてしまった。他の二頭のランポスもそれに続き、ケルビに群がっていく。

彼らの足元に生える草花は、一瞬で真っ赤に染まっていった。肉を啄んだランポスは血で嘴を染め、空に向かって甲高い声で吠えた。

俺たちは唖然と、その光景を木の影から見ていた。

「す、すげぇな。これが森の奥か・・・。」

別の木からその様子を見ていたフレントはそう呟いた。ケルビは普段から見慣れて

いる動物で、人にはあまり懐かないが可愛いと女子供から人気だ。無惨にも捕食されている光景をみると、なんとも嫌な気持ちになる。

「って、こんなうだうだしてる場合じゃねえな。おい、どうする。」

フレントはランポスに気づかれないように声量を抑えて訊いてきた。額には若干の汗が見える。

「ケルビに夢中だから、今のうちにここを離れるぞ。枝一本踏むな。」

サディとフレントは無言で頷いた。俺は足元に目を配りながら、サディとフレントを先に行かせた。離れようと寄り掛かっていた木から手を離し手を握ると、汗が滲んだ。

腰ほどの高さの段差を登ろうとしたとき、サディがやってしまった。苔の生えた岩に片足を乗せ、体重をかけた途端にずるりと滑ってしまったのだ。体を打った音は静かな森に、やけに大きく響いたように聞こえた。全身の血の気が引き、冷や汗がドッと溢れ、全員の動きが固まった。

恐る恐る後ろを振り返ると、どうやらこちらには気付いていないようである。よく考えればそこそこ距離があった上、まだケルビに夢中な様子であった。

「大丈夫だ。落ち着いて行け。」

俺たちはそのまま抜き足差し足で森を引き返そうとした。しかし今度は、すぐ近くでランゴスタのやかましい羽音が聞こえてきた。茂る低木の木々の向こうに、確かにラン

ゴスタの影があった。決して一匹ではない。
「羽音に紛れれば、足音も消せるだろう。早く行こうぜ。」
焦り気味にフレントが言った。今にも走り出してしまいそうだった。
「彼らに気づかれたらランポスも一緒に引き付けてしまう。静かに行動しましょう。」
先程の一件でサディは岩に脛をぶつけているのを俺は見ていた。どちらにせよ走ってはいけないことは確かであった。
ランポスの甲高い声が、俺たちのいる方向に向かって響いてきた。もうケルビを食べ終えたのか、足音がだんだん近づいてきている。きっとランゴスタを襲うつもりなのだろう。俺たちはまた木の影へ身を隠した。
「サディ、足大丈夫か。」
「うん、この程度はなんともない。」
草や枝をじりじりと踏む足音、奴等の喉の音まで俺には聞こえた。どうやらランゴスタを追ってかなりの距離まで接近してきているようだ。小声でやりとりを済ませた俺たちはすぐに息を殺し、ランポスが去るのを待った。一瞬の油断も許されず、胸は動悸ではち切れそうだ。
裏で激しく木が揺れ、地面が太鼓のように鳴った。飛びかかったのだろうか。木の影にいた俺たちの目前に、ランゴスタが飛び回ってくる。来るんじゃねぇ!そう心の中で

叫びながら、身を屈めるように二人に促した。サディは両手を口で押さえて縮こまっている。

なにをトチ狂ったのかランゴスタはまるで挑発するかのように、俺たちの真上をチラチラと飛び回っていた。このままでは、俺たちがランゴスタの囮になってしまう。しかし、俺たちはその場で蹲り、ランポスが立ち去るのを祈ることだけしかできなかった。しかし、自然とは時に無慈悲になものである。足音がしたかと思えば、サディが蹲る背後に、一匹のランポスがぎょろりとその姿を現した。サディを横目に捉えると、黄色の嘴から鋭い牙を覗かせた。

「この野郎っ!!」

俺がサディの腕を引こうとした時、フレントの怒号が森に木霊した。

目が覚めた。家には、どうやら誰もいないらしかった。ぼんやりとした頭を持ち上げ、ベッドから降りたときに昨日のことをハッと思い出した。もぞもぞと服をきて窓から空を見ると、既に太陽は空のテッペンに登ろうとしていた。陽の光に目を刺され、私はすぐに部屋に引っ込んだ。

しかし指で窓を少しだけ押して、わずかなその隙間から村の門を覗き見てみた。案の定、誰もいなかった。窓を閉めると、普段と変わらない気持ちのつもりで、黒いローブ

を羽織って家を出た。顔を洗おうと裏にある池に行くと、ピンクのスカーフを巻いた一匹のモスが水を飲んでいた。

「ラブちゃんおはよう。もう昼だけど。」

そう話しかけると、ラブちゃんは私の足元に寄ってきた。もっさりと苔が生えた背中を撫で、ひくひく動く大きな鼻にキスをした。

顔と口を洗い、まだ若干寝ぼけている頭を叩いた私は、自宅を後にした。

「いらっしゃいませー！あら、アーミカちゃん？」

今日のイアの食堂はお客さんがいた。キッチンの前のカウンターでどんぶりを勢いよく掻き込んでいたおじさんが、横に一つズレてくれた。私はその隣に座り、モス○ーガーを注文した。

「はいはいー！って、今日じゃなかったかしら。」

「あ？」

「おじいちゃんから聞いたのよ。アンタとサディとお兄さんとアーミカちゃんが森を調査しに行くって。」

「なんであたしまで。」

なんであそこにいただけで行くことになっているのだ。あんな危ない森に危ない奴らと行くわけないだろう。私は皮肉な笑い方をして言った。

「あいつらと一緒にすんなし。」
　それを聞いたイアはクスッと笑った。
「でもちゃんといつもサディの話とか聞いてくれるじゃない。」
　あいつらは本当にバカ。アンタと兄ちゃんは見た感じで分かるが、知的そうに見えるサディも普通にバカ。いや、バカになってしまったと言った方が正しい。
　アンタのせいだ。あいつは私とサディが小さいころからずっとモンスターを追っていた。今とやっていることはほとんど変わらず、探検とか言って森へ飛び込んでいくだけ。泥だらけになって帰ってくることもしばしば、怪我をしてくることもまた相応にあった。
　森の奥に行こうとかいうバカには当然誰も関わろうとしなかった。でも、サディは違った。彼は戻ってきたアンタを心配して話しかけたり、おにぎりを持っていったりしていた。しだいに仲良くなっていくと、サディは差し入れを持っていくついでにアンタの話を楽しみにするようになった。差し入れのクオリティは謎に上がっていき、アンタのために料理の腕をメキメキとあげた。そんでしまいには一緒に森に行くとか言い出す始末だ。もうバカとしか言いようがない。
「…　早く作れよ。」
「はいはいかしこまりました。」

イアはそう言ってまた少し意地悪げな笑みを浮かべた。こういうからかいほどイライラするものはない。ランゴスタの羽音の方がずっとマシだと思うぐらい。っていうか元はと言えば、全部あいつのせいだ。私が寝過ぎたり、イアにからかわれてるのも、全部あいつのせいなんだから…。

私はムシャクシャして握ったコップに力を込めた。

そのまま森で食べられちゃえばいいのに。そう思った矢先だった。

「大変だ――！大変だ――！」

いきなり男の大声と共に村の鐘がやかましく鳴り響いた。私を含め、食堂にいた全員が声のした方向へ注目すると、木こりの男が汗だくになり、息を切らしながら門の内側へ転がり込んできていた。数人の村人が彼に駆け寄ったが、木こりの男はそれをよそ目にこう叫んだ。

「あいつらがきた。ランポスだ！」

ランポス。確か森にいるっていう青い竜だっただろうか。サディやアンタから、森で遭遇したら気をつけろって口酸っぱく言われていたような気がする。

「イア、逃げよう。」

イアは頷くとすぐにキッチンのものをガサガサとしまい込み始めた。私もそれを手伝い。あらかた終わると、一直線に彼女の自宅へ向かった。村の雰囲気は物々しくな

り、住民たちは慌ただしく行き交っていた。
　イアの自宅まで来ると、ちょうど村長がスパンと扉を開けて出てきた。背後には村長の奥さんが肩を弱々しく掴んでいた。
「なにをしておる。早く家に入るんじゃ。」
　私の肩ぐらいの身長の村長は、農作業用のクワを背負っていた。
「ちょっとおじいちゃん、どこいくつもり！」
　イアは強引に行こうとする村長を引き止めて言った。
「これでも村の長。わしが参らんでどうするというのじゃ！なぁにこれでも若い時はランポスどもをばっさばっさと・・・。」
「今は無理でしょう！大人しくするのよ！」
　イアに片手で持ち上げられた村長は、そのまま鞄に押し込まれるように家の中に放り込まれてしまった。
「アーミカちゃんも、お入りなさいな。」
　彼女は私にそう促した。自分から逃げようと言い出したものの、私は大事なことを忘れてしまっていた。ラブちゃんを庭に置いたままだったのだ。家の中に避難させておかないと、きっとランポスに食べられてしまう。
「すぐ来るから。」

そう言って私は自宅の方向へ駆け出した。女性や子供が家に避難していく中、知らせを聞きつけた男たちが松明や槍などの護身用具を持ちよって集まっていた。

私はその男たちを見て、サディや兄ちゃん、アンタのことが頭に浮かんだ。こんな肝心なときに森なんかに出掛けやがって。お前らの大好きなモンスターがすぐそこまで来てるのになにやってるんだよ。私は焦燥感の入り混じった怒りを煮え立たせた。しかし、まさかすでに森で食われてしまったんじゃないか、どうしてもその考えも頭を過ってしまっていた。行き場のない不安と焦りが胸の中を揉みくちゃにしていく。

早く帰ってきて。そう叫びたくなった。

私は自宅の前まで来ると、すぐに裏手に回った。しかしそこに、ラブちゃんの姿はなかった。

「嘘でしょ…。」

放飼も同然の状態ではあったものの、庭から出ることは滅多にない。サディたちが採取してくるキノコを待って一日中池の周りをうろついているだけで、彼からも世界一行動範囲が狭いモスと太鼓判まで押されているほどだ。

最悪の結末が脳裏に浮かぶ。胸の鼓動が激しくなった。動揺で冷や汗まで噴き出てきて、私は焦りのままなにも考えずに走り出した。

「ラブちゃん！どこにいるの！」

青き山賊②

これは、自然の摂理なんだ。大自然に生きる者の宿命なんだ。

凄まじい緊張が動悸になって、胸を突き破ろうとしていた。もう、背は向けられなかった。片手に持ったナイフを硬く握りしめ、目の前のランポスに向けた。ゆっくりとにじり寄るランポスに思わず後退りしながらも、ナイフの先だけはずっと奴らに向けていた。

サディの元に近寄ってきたランポスに対するフレントの不意打ちをきっかけに、俺たちは完全に縄張り争いの構図になっていた。

俺とフレントはナイフと斧をそれぞれ構えて3頭のランポスと睨み合っている。俺におもいきり腕を引かれたサディは、背後にきっといるはずだ。怯えた息遣いがかすかに聴こえてくる。

「サディだけでも逃すぞ。」

俺はランポスと視線を交えながらフレントに囁いた。

「あぁ。」

フレントはやけに低い声で言った。俺は振り返らずにサディに逃げるように言った。

鞄が地面に捨てられる音と共に、サディが違和感のあるリズムの足音を立てて逃げていった。

それを見たランポスの一頭が追いかけようと足を踏み出したが、出せる限りの大声で叫び、ナイフを突きつけて威嚇した。

ランポスもそれに応じて甲高い声で空に向かって吠え、今にも飛びかかろうとしていた。

「やってやろうぜ…。」

次の瞬間、発狂したかのような奇声を上げたランポスは、俺とフレントに向かって牙を剥きながら襲いかかってきた。

目を見張るほどの跳躍力だ。見上げるほどまで高く飛んだランポスは、鋭い脚の爪を地面へ突き立てた。その場にいたもう一頭のランポスもそれに続いて俺に向かって噛み付いてきた。よろめきつつも後ろへ飛び退き、攻撃の機会を伺った。

狙いは奴らの目。サディを睨んだランポスは、逆側にいたフレントに目を傷つけられ、あっけなく退散していった。こいつらの弱点はきっと、目ん玉だ。

再び噛みつこうとしたランポスを避けた俺は、目掛けてナイフを突き出した。しかし顔にすら届かなかった。

フレントも斧を振り回して攻撃を試みるが、まるで当たる様子がない。さっきのは

ラッキーパンチだったようである。

「アンタ、振り回すだけでいい。あいつらもビビってるぞ。」

フレントは荒い呼吸をそのままに、俺に言った。たしかに、彼が斧を振り回すたびにランポスは後退りを繰り返していた。

「うおおおお!」

俺は叫びながら乱暴にナイフを振り回した。たしかにランポスも怯んでいる。なんだこいつら、意外と臆病者じゃないか。

だんだんと吹っ切れてきて、ランポスとの距離も近づいていた。あいつらが繰り出す攻撃も、よく見れば俺の反射神経で十分避けることができたし、ナイフを振るだけでビビるランポスに手応えを感じ、果敢に攻撃を仕掛けた。

引っ掻こうと爪を振りかざすランポスの横に回り込むことができた俺は、ここぞとばかりに渾身の力でナイフを首に突き刺した。皮を突き破り、肉を抉る鈍い音が手を伝った。

ランポスが鳴き、首を振り上げて暴れた。凄まじい力だった。姿勢を崩しかけ、思わずナイフから手が離れた。

俺はランポスの脇腹を蹴り、よろめいたところに少し助走をつけて体当たりをかました。見事にランポスは倒れ、首に刃が刺さったままもがいていた。

「そのままやっちまえ！」
フレントがもう一匹のランポスを威嚇しながら言った。俺は言われずとも倒れたランポスの首を力に任せて蹴りまくった。
ランポスは立ち上がらなかったが、気絶する気配すらなかった。流石に息が上がり、蹴りに力が入らなくなってきた頃、フレントが突然目前に現れ、ランポスの首目掛けて手斧を両手で振りかざした。足元に血が飛び散り、ランポスの抵抗が一気におとなしくなった。
フレント俺のナイフをランポスの首から抜いて俺に渡した。ナイフには血がべったりとついていた。もう一匹いたはずのランポスは、既にどこかへ消えていた。
森が再び静寂に包まれようとしていた。肩で息をする俺たちのむさ苦しい呼吸の音だけが混じって消えてを繰り返していた。
「どうやら、俺たちが勝ったみたいだな。」
フレントは仕留めたランポスから手斧を抜き取って言った。足元には首皮一枚になったランポスが血を迸らせ、倒れていた。
「とりあえず、村に戻ろうぜ。サディもまだ近くにいるだろ。」
「あぁ。」
少し胸を締めるような感覚を覚えつつも、俺たちはすぐにサディを追おうとした。

しかし、妙に騒がしい音がする。俺はすぐに嫌な予感を感じ取った。二人同時に足が止まり、お互いに顔を見合わせた。

「走るぞ。」

そう言って駆け出したのも束の間、ふたたび奇声がどこからともなく響いてきた。完全に包囲されていたと気づくには、時間は要らなかった。フレントが横で舌打ちした。

俺たちの周りには、あっという間に両手で数えるほどのランポスが集まっていたのだ。彼等は俺たちを嘲笑うかの如く、空に向かって吠え続けた。

「ハハ･･･ どうやら一本取られちまったみたいだなぁ。」

不思議と絶望感はなかった。絶対に切り抜けてやる。それだけだ。

「もういいぜ。なんだってこいよ!」

鼻で大きく深呼吸をした俺は両手でナイフを硬く握りしめた。

「おうよ!」

追い込まれた者の、断末魔のような叫びが轟いた。俺とフレントは目の前のランポスの大群に向かって全速力で突っ込んでいた。

「目を瞑って!!!」

突然の出来事だった。目の前に見覚えのある虫かごがボテンと落ちた。虫かごはまもなく鋭い音と共に強烈な光を発した。思わず目手で両眼を覆う。

「今のうちだ！はやくこっちへ！」
目を開けると、クラクラとよろけるランポスの向こう側に、サディがいた。
一瞬何が起こったのか全くわからなかった。しかし、虫かごのなかからチラリと姿を現した一匹の虫に、俺は思わずはにかんだ。
「なるほどね。おいフレント、急ぐぞ。」
ポカンとしているフレントの頬を叩き、サディのもとへ駆け寄った。サディは汗だくになりながら眼元を拭って微笑み、こう言った。
「間に合ってよかった。」
それを聞いたフレントは鼻で少し笑った。
「なぁに、軽く捻ろうとしてたんだ。」
俺はフレントの頭を小突いた。すると彼は、いたずらがバレた子供のように無邪気に走り出した。その滑稽ながたいのいい背中を追いかけ、俺たちも村へ急いだ。

村の森まで来ると、既に男たちがわらわらと走り回っていた。槍の影、松明の火影が物々しく行き交っていた。森の奥から突然現れた俺たちに気づいた男の一人は、両手を大きく振りながら怒鳴った。
「おぅいこらぁ！なぁにやってんだぁ！」

俺たちはその男の元に行くと、いきなり俺の頭を叩いてきた。
案の定というか、村はランポスに襲われている様子だった。日頃森に行ってるやつが、こんな時にいないとはどういうことかと、男は文句を言ってくるのだった。
誰がモンスター退治のエキスパートだと言ったのだ。俺はモンスターを狩りに森に行ってるわけじゃない。
「別にそんなに怒ることないだろう。」
そうすると男はまた俺の頭をはたいた。
「村長のとこの娘さんがお前たちがどうのこうのって言ってたぞ。」
「イアが？」
彼女には俺たちが森に行くことは伝えておいたはずなのだが。
「心配させちゃったんだよ。きっと。」
急に用でも足したくなったのか、サディはなにかやきもきした様子で言った。イアの家へと行こうとすると、フレントはアーミカの無事を確かめると言って自宅へ急いだ。
「おい、早くイアの家に行くぞ。」
「う、うん。急ごう。」
フレントの背中に視線を送っていたサディに、俺は大きめの声で言った。
イアの自宅の扉を叩くと、間も無くして勢いよく開いた。中から安堵した様子のイア

が現れたが、俺たちのことを見た瞬間に、険しい表情に変わった。あきらかにおかしい反応であった。
「イアは無事だったんだな。よかった。」
「よくないわよ！なにしてんのあんたたち！」
　俺の言葉に、イアは突然鋭い剣幕で声を荒らげた。俺は反射的に腹がたった。こいつまであのおっさんと同じことを言うつもりなのか。
「はぁ？だいたい俺はな。モンスター退治なんて微塵も興味はねぇんだ。」
「そんなことわかってるわよ。」
「じゃあなんなんだ。」
「イアさん。何かあったんですか。」
　サディがお互いの間に割って入った。イアを宥めるように、冷静な口調で話した。
「アーミカちゃんがいないのよ。ここに入れようとしたんだけど、すぐ戻るからって自宅の方に行ったまま戻らないの。」
「えっ」
　どういうことだ。あいつがこんな時に限ってなにを急ぐというのだ。サディになにか知らないか聞くと、わからない、と一言だけ言った。目の焦点が定まらない様子で当たりをキョロキョロとしている。俺はフレントが自宅を見に行っていると伝えた。噂

をすればなんとやら、そう言った途端に彼は走ってこちらに向かってきたのである。たどり着いたのも束の間、彼はこう言った。

「アーミカとラブちゃんが家にいねぇんだ。お宅にお邪魔してないか。」

「なんてこった…。」

俺は思わず頭に手をやった。考える暇はなかった。俺たちは三手に分かれると、ふたたび森へと飛び込んだ。今日の森は、実に不快な匂いに満ちているような気がした。

彼女が行方を晦ました理由、きっとその原因は共に姿を消したモスのラブちゃんにある。僕は村についてから押し寄せていた疲労も忘れ、走りながら必死に考えていた。

モスはとても警戒心の強い生き物だから、少しでも騒がしくなると、忽然と姿を消す。しかしそんなモスとはいえラブちゃんは村の中で暮らしている。ランポスの襲撃を感知できたとしてわざわざ森に逃げることがあるのか。仮にそうだとして痕跡があったとしても、アーミカがそれを追っていれば今頃村にいるはずだ。

痕跡を追えなかったとすれば、無作為に森に飛び込んでいることになる。そうなれば、こんなこと考えたって仕方がないじゃないか。僕はこんがらがった考えを投げ出すように頭を振った。

「アーミカ!·聞こえていたら返事をしてくれないか。」

アーミカらしき声は全く聞こえなかった。耳に入るのは、背後の村やその周辺から聞こえるざわめきだけだった。

勝手に持ち去ってきたその辺に立てかけてあった誰かの槍を掲げて振りながら、必死に森へと叫んだ。アーミカ、君はそんなに馬鹿じゃないはずだ。少なくとも僕よりは。

そこまで遠くへは行っていないはずだという算段の元、広く浅くの捜索をしているが、現在地と叫び声の届く範囲から考えれば、なかなかに奥まで進んでいるようだ。いくら呼んでも、彼女の声になって返ってくることはなかった。

もうやけくそになりそうになった頃、なにか軽くて硬いものをコツンと蹴飛ばした。石ころかと思ったが、それは間違いなく彼女の物だった。

「スリングショット…。」

拾い上げたのは、アーミカが肌身離さず持っているスリングショットだった。僕の中に、うっすらと希望の芽が出始めた。しかし同時に、ふりしきる不安の雨もあった。

僕はアーミカが通れるような場所をひたすらに突き進んだ。彼女の名前を叫びながら、腕に擦り傷を作りながら進んだ。

「助けて」

今、なんて言った。僕は足を止めた。あまりにも微かな音だったのだ。草一本揺らす音すらも、この瞬間の僕には耳障りだった。

「アーミカ!」
「サディ」
なにも考えず、僕は右手にあった茂みに突っ込んだ。枝や草木に体を殴られながらも槍で払い除け、林へ出た。すると彼女の姿はすぐに見つかった。
尻餅をついた体勢で彼女から見た正面の一点を見つめていた。彼女が見つめるその先は、大木が邪魔で確認できなかったものの、まず僕はアーミカの下へと走った。
「アーミカ!やっと見つけた。」
「サディ・・・ !」
彼女の顔はひどく青ざめていた。腰が抜けたのか、立とうとはしなかった。
「助けて。」
彼女がそう言って指差した先には、木陰の中で目を不気味に光らせるランポスの姿があった。背中が凍りつくように痺れ、それは頭頂部にまで届いた。
僕はなれない手つきで槍を構え、アーミカの前に立ってみせた。
「アーミカ、立てない?」
振り返らずに言った。しかし決してランポスに目を合わせようとはしなかった。
「ううん。」
背後でのそりと立ち上がる物音がした。ランポスはお構いなしに高らかに吠えた。

きっと仲間を呼んでいるのだろう。
「アーミカ、君が先に逃げないとだめだ。二人とも背を向けたら、きっと彼は追いかけてくる。」
「は・・・？」
「いいから。絶対に村へ戻るんだ。」
ランポスは木陰から、こちらを見据えると、今にも駆け出しそうな気配で近づき出した。
「でも・・。」
「心配はいらないよ、ありがとう。すぐ行くから。」
不思議と吹っ切れていた僕は、槍を構えてスタスタと歩き出した。そして突進とも呼べるスピードで、僕はランポスに突っ込んだ。
逃げ腰で突き出した槍は、カチンとチンケな音を立ててランポスの爪にぶつかった。邪魔な木の枝を跳ね除けるように、ランポスは僕の槍をどかして噛みつこうと身を乗り出した。つまずくように後退し、なんとか避けた僕は負けじとランポスを小突き回した。
「この！この！」
嫌がる様子を見せていたランポスは、とうとう痺れを切らしたのか僕の槍に噛み付い

た。そしてそのまま乱暴に振り回した。僕はランポスの力に歯が立たず、まるで人形のように左右に揺れた。柄を握り、踏ん張っていたがランポスの強靭な顎にたちまち槍が折れ、僕はその場にひざまづいてしまった。

恐る恐る上を見上げると、乾いた血のように黒い爪を今にも振り下ろさんとしているランポスの姿。すぐに僕は負けを悟った。

すぐに頭を下げ、両手で覆って蹲った。その瞬間、ランポスの悲鳴と生々しい音が響いた。頭を覆っていた手にペトリと温かいなにかが当たった。

「アーミカとサディになにしやがんだ。」

ランポスの首にはナイフが深々と刺さり、血が滴り落ちてきていた。僕の手の甲は、真っ赤に染まっていた。

「アンタ…。」

アンタはそのまま火が灯った松明でランポスを殴りつけると、そのままランポスを力任せに倒してしまった。

そこにすかさずフレントがやってきて、首目掛けて斧を豪快に振り下ろした。瞬く間にランポスは血飛沫と共に息絶えた。

「二人とも大丈夫か。」

過呼吸気味になっていた僕は、なにも言うことができなかった。手の甲は真っ赤に染

まり、腕には擦り傷だらけで、服もボロボロになっていた。力が入らなくなった僕は、そのまま仰向けに倒れた。

「サディ！」

猪突猛進

第四話「猪突猛進」

結局、昨日の捜索ではラブちゃんは見つからなかった。しかし、とりあえずはアーミカが無事だったことに安堵している。もしあの時、サディがもっとはやく見つけてくれなかったら、と考えるだけで恐ろしい。

今更そんなことを考えたってしょうがないことはわかっている。しかし、俺は不安で仕方がない。

「ん‥‥‥。」

居間で雑魚寝になっていたアーミカがむくりと目を覚ました。昨日の疲れからか、飯を食ったあとにそのままバッタリと寝てしまっていたのだった。

「おはよう。」

「‥‥ はよ。」

くっきりと目元に涙痕を作っていたアーミカは、すぐによろよろと家を出て顔を洗いに行ってしまった。俺はとりあえず朝食を準備するために腰を上げた。

窓を開けると、早朝の新鮮な冷たい空気と朝日が颯爽と舞い込んできた。濁りきっていた空気が洗われていくのが感覚的にわかった。

昨夜の時点で言っておこうと思っていたことは、結局朝食の時にも言い出すことができないままでいた。しかしこのタイミングを逃すことはできないと思っていた俺は、ジュースを飲みながらそっと口を開いた。

「なぁ、アーミカ。」

猫背になって少し俯いていた彼女は、視線だけをこちらに向けた。

「ラブちゃんの捜索、行くのか。」

「行くけど。」

「そうか。」

しばらく無言の間を作ってしまった。余計な導入を入れようとして見事に失敗していたのだ。だめだ。俺だったらもっとストレートに言わねば。

「‥‥　疲れてないか？」

「ちゃんと寝たもん。」

「そう、だよなぁ‥。」

まただ。さっきと同じじゃないか。俺は少し苛立ちさえ覚えた。濁してはいけないことはわかっている。俺は残ったジュースを飲み干して息を整え、きっぱりと言った。

「なぁ、アーミカ。捜索は、兄ちゃんたちに任せてみないか。」
アーミカは予想通り一気に怪訝な表情へと変わっていった。いきなりブチ切れるもんかと覚悟していたものの、意外とその感情は穏やかに見えた。
「別に好きにすれば？」
「え？」
俺は困惑した。俺はもちろん捜索にいくつもりだ。アーミカの言葉の意味が読み取れずにいた俺は、また聞き返した。
「誰が兄ちゃん達と行くっていったのさ。」
それに対してアーミカが言い放ったのはまさかの一言だった。昨日のあの一件を、一晩寝て忘れてしまったというのだろうか。
「ちょっと待て、一人で行くなんて言わないよな。」
俺は思わず音を立ててカップを置いた。
「私さ。馬鹿じゃないから兄ちゃんの言いたいことぐらいわかるんだわ。足手まといだから留守番してろってんでしょ？はっきり言えよ。」
アーミカは顔を歪ませていた。彼女はいつになく怒っていた。俺は想定していた反応よりもずっと悪いものであるとすぐに察知した。
「誤解だ。そんなつもりじゃない。」

「そんなつもりだろ。昨日のあたしを見たら一目瞭然でしょう。」
　俺は思わず言葉に詰まってしまった。こんな時、サディやアンタがいればと思った。
「違う。俺はお前が心配なんだ。」
「はぁ？最初は疲れてないかとか言って今だって言葉に詰まってたくせになんだよ今更。」
「落ち着いてくれ。」
「落ち着けるもんか！ラブちゃんは今頃お腹を空かせてるんだよ!!」
　はじめてアーミカが俺に向かって怒鳴った。俺はまた、なにも言い返せないままアーミカの鋭い眼差しに刺されていた。彼女は息を震わせ、自分の部屋へと潜ってしまった。
　俺は思わず深いため息をついた。いつからだろう。妹とこんなにそりが合わなくなったのは。しかし今のアーミカはいつになくおかしい。俺はそれをさらに狂わせてしまった気がしてならなかった。
「おいっちにー！おいっちにー！」
　朝一番のお日様をたっぷり浴びながら、俺と村長はイアの食堂の前に集い、体操していた。

「はい、次は天高く翼を広げる火竜のポーズ！はい！」
村長がランポスをバッサバッサしていた若い頃から続けているらしいこの体操。俺もバッチリ習得済みだ。この体操をしている間は村なぜか中の笑い者だが、みんなはこの体操の効力を知らない。憐みの目を向けてやりたいのはこっちの方である。
「最後にランポスの気高き遠吠えのように溌剌とした笑顔でー！」
「ギャッハッハーイ！」
最後におもいきり笑うこの顔の体操が、水で顔を洗うよりもずっと引き締まる。そしてテンションも上がるので一番好きな項目だ。
「はいはい、うるさいからどっかいきなさい。」
耳を塞いでいたイアが呆れた様子で店の準備をしながら言った。
「なんだよお前だってできるくせによ。」
「できてたまるかそんなもん！」
「わかったからはやく飯作ってくれよ。」
俺はお駄賃をイアに手渡して席にどっかりと座った。ぶつぶつと文句を言いながらパンを焼きはじめたイアをよそ目に、門に向かう一人の少女が目に止まった。
「ようアーミカ。」
彼女はいつも通り不機嫌そうな顔で背中を丸めて歩いていた。メラルーが物色でも

するかのような目つきでこちらを見ると、三回くらい瞬いて目を逸らした。いかにも会いたくないやつに会ってしまった、というような反応である。

イアの挨拶すらも返さずに、彼女はまた歩きだした。

「どこいくんだ。」

シカトして過ぎ去っていく彼女の背中に話しかけた。すると立ち止まったアーミカは「ラブちゃんを探すのに決まってるでしょ。」と言った。

「そうか。頑張れよ。」

しばらく間を置いた俺はそう言った。それを聞いたアーミカは、また門に向かって歩きだした。

「ちょっと、なに言ってるのよ。アーミカちゃん！一人は危ないわよ。みんなと行きなさいな。」

俺のパンを焼いていたイアが慌ててキッチンを出ようとした。

「いいからいいから、ほっとけって。」

俺は一足先に門を出ていくアーミカを見て言った。イアは遠くには行くなと大声で忠告だけして戻ってきた。

「さっさとご飯済ませて、追いかけて頂戴。」

「俺らが行く頃には見つかってるかもな。」

そう言うとイアはカウンター越しに俺の頭を叩いた、いや殴った。モス一匹の捜索になにをそんなに焦っているのかまったく理解ができない俺は、渋々謝ってパンを貪った。

こうしてイアに尻を叩かれるようにして、サディとフレントと俺の三人はモスのラブちゃんを探しに森へと繰り出した。森は昨日までの騒然とした雰囲気は微塵も感じられず、長閑な空気に満ちていた。

きっと静かになるまでどこかに隠れていただけだろうし、そうなればもう出てきている頃だ。正直サクッと見つかるもんかと高を括っていたが、実際は簡単に見つかるものではなかった。

まず、ラブちゃん以外のモスがほとんどいないのである。ケルビなどの草食モンスターはいるが、モスの数が明らかに少なかった。

その理由と思しきものは思い悩むこともなく、サディの提案で行った少し奥にあるキノコの群生地で見つかった。

「なんだこれ…。」

キノコの群生地は、これでもかというほどにグチャグチャに荒らされていたのだ。鮮やかに彩られていた地面は茶色の絵具をこぼしたように乱雑に掘り返され、キノコは無惨に散らかっていた。

「またランポスか。」
「いや、これを見て。」
　サディが指で示したのは、なにかの足跡だった。丸くて太く、大きい。縦長で、鋭い爪の跡がつくランポスとは全く違うものだった。
「モスにしては大きすぎるでしょう。きっと、ブルファンゴの物です。」
　ブルファンゴ。大きく反った牙が特徴の草食モンスターだ。かなり凶暴な性格で、外敵を見るなり全力で突進をかましてくる危ないモンスターとして知られている。
「とりあえず、アーミカを探しませんか。」
　ゆっくりと立ち上がったサディが言った。まだまだ疲れが抜けきっていない目をしている。休んでもいいと言ったのだが、アーミカのためだと言って聞かなかった。
「あぁ、そうしよう。」
　もし昨日と同じ形でブルファンゴと出会していたら大変だ。あれはパチンコなんかで追い払えるようなもんじゃない。
「ラブちゃーん?出ておいでー!」
　勢いのまま一人で森に飛び込んでしまったが、思いの外居心地の良い場所である。村と比べるとちょっと臭いけど、可愛いモンスターや虫がたくさんいるし、いい匂いの木

の実は採れるし、退屈しのぎには丁度いい。
それに私は、ラブちゃんを発見するための大きな手がかりを早くも握っていた。うんちである。こんな丸々とした可愛らしいものはどう考えたってラブちゃんので間違いない。匂いも当然チェック済み。最も愛している飼い主の私のお墨付きだ。
「いつまで隠れんぼしてるのー？」
すっかり不安が消し飛び、調子に乗っていた私は、またいつものように兄ちゃんたちのことを心の中で蔑み始めた。
だいたい、ラブちゃんのことを知り尽くした私と同行しないということ自体が間違いなのだ。いつもと変わらずに森をフラついているバカ三人を妄想してしまった私は、箒で払うように鼻で笑った。
「もう、いい加減出てきてよー。」
そう言って地面にあった石を蹴り上げた。石は綺麗に放物線を描きながら飛んで行き、私の前にあった大きな茶色い物体に当たった。
何気なく石が綺麗に蹴れたことにすこし快感を覚えていると、茶色い物体は突然むくりと動きだした。その大きな茶色い物体は、お尻を私に向けていた。正体は巨大なブルファンゴだったのだ。
彼は私を見るなり荒い鼻息を立て、口からはみ出た左右非対称の白い牙を振り乱しな

がら睨みつけてきた。突然すぎる出来事に状況が飲み込めなかった私は、ブルファンゴとバッチリ目を合わせたまま動くことができなかった。

ブルファンゴは唸り、地面を二、三回蹴ると全力で私に突っ込んできた。私は転がりながら横に逃げると、ブルファンゴが真横を猛スピードで通り過ぎた。その後を草木や髪が激しく靡くほどの突風が突き抜けていく。

巻き上がった土煙に咳き込みながら立ち上がった私は、振り返り再度突進を試みるブルファンゴを見もせずに走りだした。

「なんなのもう！」

スリングショットで反撃など想像もしなかった私は、無我夢中で方向感覚もないまま走った。唸り声とふとましい足音が後ろから迫ってきた。私は背後を振り返り、また横に逃げた。土煙が巻き起こり、草木が揺れる。

倒木が入り組んだ隙間を通り抜けたが、あの巨大なブルファンゴは牙で倒木を跳ね飛ばし、私を執拗に追いかけた。

吹き飛ばされた木片は私の目の前に降り注ぎ、行手を阻んでしまった。追い詰められ、一瞬で頭が真っ白になった。振り返ると、そこにはまだまだ疲れる様子のない、地面を蹴りたてるブルファンゴの姿があった。

（殺される…　!!）

その時、どこからともなく〝あの時〟に似た奇声が響いてきた。しかしそれはあの時に聞いたものよりも声量が大きく、よりおぞましいものであった。

考えたのも束の間、私の頭上を大きな黒い影が通り過ぎた。土埃を巻き上げながら着地し、巨大なブルファンゴの前に立ちはだかったのは、彼と同等の体格を持った巨大なランポスだったのである。

「へ…？」

その巨大なランポスはブルファンゴを捲し立てるように威嚇をすると、空に向かって吠えた。全く意味がわからないが、どちらも敵意を向け合っているようだ。私はこの混乱に乗じて木片を乗り越え、我を忘れて全力疾走した。

これでもかというくらいに走り、力尽きて座り込んだ頃には意識が朦朧とするまでになっていた。

「死ぬかと思った…。」

ひとまずブルファンゴを撒くことができたが、私の心の中にはみるみる内に不安が募っていた。あんなバケモノ二匹がいる森で、ラブちゃんが生きているのかということだ。

「なんで…。ランポスは昨日追い払ったんじゃないの…？」

私は呟きながらよろよろと立ち上がって、歩き出そうとした。しかし、ラブちゃんの

手がかりがあった場所からはかなり離れてしまっていることに気付いた。場所なんて覚えてないし、ここがどこかもわからない。

呆然と立ち尽くしていると、可愛らしい鳴き声が聞こえてきた。声の主を探すと、なんとそこには見覚えのあるピンク色のスカーフを巻いたモス、ラブちゃんがいたのだ。

しかし声の主は、彼女ではなかった。背中に跨っている一匹のメラルーのものだったのである。歌でも歌っているのだろうか。ラブちゃんに跨ったメラルーの後ろには、ピックアックスを持ったメラルーが二匹付き添っていた。

「ラブちゃん！やっと見つけた！」

私は泣きながらすぐにラブちゃんの元へと駆け出した。それを見た付き添いのメラルーは、ピックアックスを構えて私の前にトコトコと現れた。完全に不審者を見る目つきだった。

「な、なにさ。」

「ニャー。」

「え？」

「ニャー。」

全くわからない。たちまち涙腺が萎えてしまった私は、頭を抱えた。するとラブちゃんに跨っていた一匹のアイルーが付き添いに向かって話かけた。付き添いのメラルー

たちは後ろに戻っていった。
「ボクタチニ、ナニカ、ヨウ?」
突然ぎこちないカタコトでメラルーは話し始めた。どうやら人間の言葉が理解できるようである。私は驚きつつもしゃがみ、メラルーと目線を合わせると経緯を説明した。
「そのモス、私の家族なんだ。迷子になってたみたいでね。探してたの。だから、かえして。」
実際ラブちゃんも私の足元まできて、スリスリしてくれている。私はラブちゃんを撫でると、可愛らしい声を出して鳴いた。
「カゾク、ソウナノカ?」
アイルーはラブちゃんに向かって話しかけた。数秒の沈黙の後、メラルーは相槌を打ったり、「ニャハハ」と気味悪く笑ったりした。しばらくその光景を眺めていると、人間の言葉を話すメラルーはラブちゃんから降りた。
「ソウカソウカ、オマエ、モスダッタノカ。」
「は?え?私がモス?」
私の反応にメラルーは首を傾げた。
「ラブ、ソウイッテタゾ?オマエ、アーミカ。モスノ、オネエチャン。」

「なっ・・・。」
　私は感動とショックで凍りついた。いろいろな解釈が私の脳内で飛び交っていた。その間に人間の言葉を喋るメラルーは付き添いのメラルーに事情を説明してくれたようで、ラブちゃんは無事に私の元へと戻ってきた。
「ラブ、オイシイキノコノバショ、シッテタ。ダケド、キノコ、ナイ。キット、ドスファンゴノ、シワザ。」
「ドスファンゴ?」
　聴き慣れないながらも、嫌な予感を含んだ言葉が私の耳に届いた。ブルファンゴの仲間だろうか。
「ドスファンゴ、ブルファンゴノ、オヤブン。シロイ、ケト、キバ、アル。スゴク、オオキイ、ソシテ、ツヨイ。」
　完全に私が出会ったブルファンゴと一致していた。巨大な体格に、背中のコブを覆う白い毛、左右非対称の大きな牙。あれはブルファンゴの群れを率いるボス、ドスファンゴだったのだ。
「あたし、そいつ見たよ。ついでに、巨大なランポスも見つけたんだ。」
　巨大なランポスという言葉に、メラルーは目を見開いた。
「ソレ、ドスランポス。ランポス、ノ、オヤブン。オオキクテ、ツヨイ。アタマモ、イイ、

インテリ。ボクタチノ、シュクテキ。」

やはりそうだったか。私はどうやら、それぞれの群れのボスを引き合わせてしまったようだ。メラルーによればここ数日、ランゴスタを追って森までやってきたランポスの群れと、どこからともなく現れたファンゴの群れが睨み合っている状態だったという。

今に二つの群れが激突してしまうだろう。そう言ってメラルーたちは怯えていた。森は大混乱になると。心配そうに私を見上げるラブちゃんを優しく撫で、サディや兄ちゃんのことを思い浮かべた。

「大丈夫。ラブちゃんはなにも心配しなくていいからね。私が守るから。」

どこか遠くで、おびただしい獣の方向が響き渡った。森は昨日以上に不穏な空気に溢れかえっている。乱れた髪を耳にかけ、私はスリングショットを取り出した。

集結

森の奥から怪しげなざわめきが聞こえてきたのは、俺たちがアーミカを探し始めてしばらくたった頃、秘密の釣り場にいた時だった。ランポスのものと思しき声だが、普通のランポスよりももっと低く、太く、狂気を感じる。

それに加えてブルファンゴもいるとなれば、すぐに手を打たないと大変なことになる。俺たちの力だけじゃ解決できないかもしれない恐れがあるからだ。本当はすぐにでも村に戻りたいところだった。

しかしとりあえずはアーミカを探すために、声が聞こえた方角へ、森の奥へと進んでいくしかない。サディはその間、ずっとぶつぶつと独り言を呟き、メモと地面とを交互に見ながら歩いていた。

「なにかわかったのか。」

急に話しかけられたサディは弾かれたように頭を上げた。

「いや、独り言さ。今は関係のない話題だ。」

彼はそう言って少し歩調を早めた。俺はサディの気づきや閃きに賭けているところがある。だから肝心な時の彼の独り言は嫌いだった。俺はいつになく好奇心を抑えて、

違和感のある森を歩いた。
そしてずっとずっと奥に行った頃、俺たちは異様な光景を目にすることになった。
「おいおい・・・。」
思わずフレントはため息混じりに呟いた。なんと俺たちの前には、なぎ倒され、吹き飛ばされたと思われる木が所狭しと散らばっているのであった。俺も息を飲むしかなかった。
こんなことをやってのけるのは間違いなくブルファンゴのようなモンスターに違いない。しかし問題はなぜこのような事態になったのか、ということである。
「まさかアーミカが襲われたんじゃないだろうな・・。」
フレントはすぐに不安を露わにした。不意に同じことを考えていた俺はどう反応しようか迷っていると、既に地面を虱潰しに調べていたサディは否定の一言から雄弁を始めた。
「これを見てください。この足跡。」
そこにあったのは、俺の掌の何倍もある二種類の足跡だった。一つはキノコの群生地で見かけたような巨大な丸みを帯びた足跡。もう一つは巨大な鉤爪の痕跡があった。
「二種類のモンスターが争った後の可能性が高いです。アーミカとの関連性は低いでしょう。」

それを聞いたフレントは、不安の色を消せない表情で唇を舐めながら頷いた。
「気にすんな。アーミカはきっと無事さ。」
俺はフレントの背中を優しく叩いて言った。
「あぁ、悪いな。俺がもっと強く止めていれば・・・。」
「言ってもどのみち聞かなかっただろうさ。振り返る必要なんてない。早く進もうぜ、相棒。」
そう言って歩き出した時だった。先程と同じ、恐ろしい奇声が森を裂いて俺たちに届いた。それに加え、木々の揺れる音、地響きにも似た轟音が森を揺らしていた。
それらがすぐ近くにいるということはすぐにわかった。鬱蒼としげる木や草の向こうに、大きなシルエットが蠢いていたからだ。
「あれだ！」
サディが思わず声を上げた。のめり込むように目を凝らしている。
俺も正体を見破ろうと凝視した、その瞬間、その影の一つがいきなり葉を蹴散らしながらこちらに吹き飛ばされてきた。
「危ないっ。」
俺はサディを引っ張って転がった。風圧を感じた直後、背後で鈍い音が響く。すぐに起き上がって確認すると、そこには巨大な体格と、頭に真っ赤な鶏冠を持った青き竜の

姿があった。

「ドスランポス…　！」

ドスランポスはすぐに体勢を立て直すと、俺たちには目も暮れずに威嚇を始めた。

「おい！早くそこから離れるんだ！」

反対側に逃げ込んでいたフレントが叫んだ。何かと思い正面を見ると、木々をなぎ倒しながら大猪〝ドスファンゴ〟が姿を現したのだ。

再び俺はサディの腕を引っ張り、走って逃げだした。フレントが手招きする方向へと急いだ。

吹き飛ばされた木々はドスランポスを掠めるようにさらに遠くへと飛んでいく。ドスファンゴは唸り、周辺の草が薙ぐほどの荒い息とともに牙を振り乱して突進した。ドスランポスは身軽な動きでそれを避けると、遠吠えを上げながらそれを追っていった。

「誰かが知らせに行かないと。」

サディが俺を見て言った。

「一人では危ない。」

「村にはもっと多くの命があるんだ。やっぱり僕がいく。」

そう言ってサディは倒れこむようにして走りだした。俺は止めなかったが、フレントに同行を頼んだ。すると彼は渋い顔をして決断しかねている様子を見せた。

「アーミカは俺に任せろ。あいつとは少し二人で話がしたい。それに、お前も疲れてる。」
　俺は思い切ってそう言った。
「疲れてんのはお互い様だろう。」
「フレント、これが最善の方法だと俺は信じてる。だからここは、俺に賭けてくれ。」
　そう言うとフレントは軽く頷きながら俺の肩を叩き、そのままなにも言わずにサディの後を追っていった。それを見送った俺は、再びアーミカを探しに奥へと踏み出した。
　一人になって動きやすくなったはいいが、アーミカの手がかりはなかった。己の直感を頼りに、川の周辺を探して回るしかなかった。時折声を上げてみたりしたが、なかなか彼女の返事は返ってこなかった。全く当てにならない嗅覚にも頼ってみた。しかし俺はアーミカの匂いは同じ年頃の女の子とすれ違った時のような、あのフワッと残る甘い感覚が全くない匂いだということをすぐに思い出した。しかしどことなく、芳しい匂いが俺の鼻をくすぐっていた。
「間違いない、この辺りだな。」
　俺はそう呟いて匂いの発生源を探ると、三匹のメラルーと出会った。彼らはこの辺りで採れる美味しいキノコを持っていた。
「メラルー?·なんでこんなところに。」

キノコを抱えていたメラルーは俺を見ると、ぎこちない人間の言葉で喋り出した。
「コンドハ、リュウジンカ。」
メラルーはそう言った。
「俺以外にも誰かいたのか?」
しゃがんでメラルーの小さい肩を掴んで言った。
「サッキ、ニンゲント、モス二、アッタ。タシカ、アーミカト、ラブ。ドスランポスカラ、ニゲテキタ。」
メラルーの言葉に俺は無事を確信し、緊張がみるみるほぐれていった。俺はすぐにどこにいるかを尋ね、場所を聞き出すと礼も疎かに走り出した。
情報を頼りに獣道を掻き分けて進んでいくと、アーミカと思しき人影を見つけることができた。彼女は一匹のモスを引き連れて、森をゆっくりと歩いていた。木々の間から差し込む柔らかい陽光が彼女の背中を照らし、吹き抜ける風が癖毛を揺らしていた。
「おい!アーミカ!」
駆け寄りながら大声で呼びつけると、アーミカはすぐに振り返ってこちらを見た。
「探したぜ。ラブちゃん見つけられたんだな。やっぱり、流石は飼い主ってとこだ。」
そう言うとアーミカは少し口角を上げ、目尻を細くした。
「まぁね。一番ラブちゃんを熟知しているから、そんなに手間取らなかったよ。」

俺は苦笑を堪えて向き直ると、横に並んで歩きだした。
「けどな。」
そう言うと、少し得意げだったアーミカの表情は一気に冷え込んだ。彼女にはきっと、窒息しそうなほどの沈黙がこの一瞬で積み重なっているだろう。
「昨日からの行動は褒められたもんじゃない。」
「……　勝手に、ついて来たんじゃん。」
アーミカはいつもより刺のない言い方で、いつものように口答えをしてきた。
「確かに勝手だな。けど、どうして勝手についていったと思う？」
「……　別に知らないけど。」
アーミカは地面を見ながら呟くように言った。俺は聞き出すことはせず、微笑を交えながらすぐに答えを言った。
「そうか？なら、教えてやるよ。答えはな、アーミカとラブちゃんが心配だったからだ。」
「……。」
俺はチラッとアーミカを表情を伺った。彼女は顔色を悟られないようにと俯いていたが、幼い頬が赤く染まっているのはバレバレだった。
「フレントも、サディもイアも、お前らのために心配して、悩んだり揉めたりしたぜ。俺だってな。それで、ここまで来たのさ。」

「ラブちゃんは悪くない。ランポスさえ来なければこんなことには…。」
俯いたままの彼女は、少しだけ声を震わせながら言った。
「別に誰が悪いなんて言ってない。ラブちゃんだって自分の身を守るために逃げたんだ。そしてお前も、ラブちゃんを助けるために行動した。俺たちはそれを手助けするために行動した。結果、アーミカもラブちゃんも俺たちも無事だった。俺たちはこうだ。でもな。」
俺はそこで一息ついてこう続けた。
「ランポスはどうだろうな?」
「え?」
優しい風が俺たちを通り過ぎて、森の奥へと駆け抜けていく。俺はそれと同時に回れ右をして後ろ歩きになった。
「出来事ってのはな。かならず因果の関係で結びついてるもんだ。ランポスとファンゴがこんなとこまで来た理由も、きっとあるんじゃねぇかな。」
俺はアーミカの目を見てそう言った。
「自然が与える試練を絶対悪にしておくなんてもったいない。今の俺たちは、それを知る必要があるんだ。だから俺は、森へ行くのさ。」
俺はくるっと勢いをつけて進行方向を向いた。最初はアーミカに説教をしていたつ

もりだったのだが、話が逸れてしまった。まぁ、こういう話の逸れ方は、いつものことだ。普段はこんな話などふてくされた暗い目で聞くはずのアーミカが、不思議と目に光を宿しているような気がした。
「って、こんなにのんびり話してる場合じゃねぇな。」
　いくらサディとフレントを早く帰らせたとはいえ、一刻を争う事態だ。
「サディと兄ちゃんは？」
「一緒に来てたんだが、ドスランポスとドスファンゴを見かけてな。二人には一足先に村に戻って報告をしてもらってる。俺たちも早く行こう。」
　森に再び大きな奇声が響き渡った。それも、群れで飛ぶ小鳥のように何重にも重なって、悪魔の声のようなおぞましい旋律のようだった。
　ラブちゃんが怯えた様子を見せた。アーミカはすぐに寄り添って宥め始めた。俺も身構えながら近道を模索していると、俺が来た方向からさっきのメラルーが鳴きながら走ってきていた。
「どしたどした。」
「ドスランポスノ、コブンガ、タクサン。ドスファンゴノ、コブンモ、タクサン。ボクタチ、カエレナイ。」
　転がり込むようにして俺の足元に縋り付いてきた。俺はすぐに詳しく話すように

言った。どうやら、ドスランポスの群れとドスファンゴの群れが集結し始めているようだ。メラルーの帰路も、きっとあいつらに邪魔されて通れないのだろう。

俺たちはラブちゃんになんとか急いでもらいながら、村へと辿り着いた。その間も、森のざわめきはより一層激しさを増し、ケルビなどの草食モンスターが慌ただしく走り回っていた。

アーミカとメラルーたちと別れた俺は、すぐに村長の元へと向かった。ノックもせずに扉を開けると、すでにフレントとサディがいた。

「アンター・アーミカは、ラブちゃんは見つかったのか。」

フレントは目をカッピラいて真っ先に訪ねてきた。

「あぁ、二人とも無事だ。今は家にいるよ。それに、ちゃんと話しておいた。」

フレントは安堵の息を漏らし、俺に向き直ると礼を言って頭を下げた。

「水臭いな。気にすんなっつったろ。」

俺はフレントの肩を叩き、その横にどっかりと腰を下ろした。すぐに本題についての議論は始まった。どうやら、村民を少し離れた別の村に一時的に避難させようという話が持ち上がっているようだ。

「できるなら早くしたほうがいい。もうランポスの群れとブルファンゴの群れが集結しているようだ。」

それを聞いたサディは一層眉間にシワを寄せた。
「じゃあさっそく俺が皆に伝えてこようか。」
そう言ってフレントが腰を上げると村長は片膝立ちになり、慌ててそれを止めた。
「待て待て、そう簡単に言うな。」
「しかし…。」
「わかっておる。だが今から即避難は無理じゃ。まず先方に使いを送る。その間に用意をさせるのじゃ。」
村長はそう言って奥さんに紙とインクを用意させ、手紙をしたためはじめた。それを見たフレントはそのまま外へ出て行ってしまった。俺もそれに続くように、サディを連れて村長の屋敷を後にした。
向かった先は、俺の家だった。そして二人で屋根に登った。俺はぐったりと仰向けになり、空を見た。しかしサディは、座ったまま空を眺めることはしなかった。
「あー疲れた！ちょっと一休みだ。」
俺は陽光にまぶたの裏をオレンジ色に染めながら、そう言った。
「よくのんびりできるね。僕は落ち着かないよ。」
サディは爪を毟りながらそう言った。
「村長がああ言うんだから仕方ない。それに、俺はのんびりしてるんじゃない。体力回

復だ。お前も寝とけ。」
サディは不安というよりも懸念に満ちた表情をしていた。
「何か考えがあるなら言ってくれよ。」
珍しくサディは俺に意見を求めた。見透かされた気になった俺は、その胸の内を明かした。
「俺があの二頭を追っ払う。これでどうだ。」
数秒間沈黙が流れた。俺は口角を上げたまま彼の表情は窺わなかった。
「本気で言ってるのかい？」
「あぁ。」
俺は目を開けた。太陽を隠した雲が、青空の中で一際輝いていた。
「森をその目で見てきたお前ならわかるだろ。もう街の騎士団なんて待ってられないんだ。金もかかる。しばらく森なんて行けなくなるぞきっと。」
サディは納得しつつも、まだ躊躇の色を隠せていない様子だった。無理もないが。
「命より大事なものなんてないよ。」
サディの一言は俺に重くのしかかった。しかし、俺たちがやろうとしていることは命をかけずして達成できるものではない。モンスターとの命のやりとりは、絶対に避けられないことになるだろう。俺は、その覚悟はとっくにできていた。

「そうだな。でも、俺は命をかける価値はあると思うぜ。いや、かけなくちゃならないと思う。モンスターと同じようにな。」
　そう言って俺は懐から紅蓮の鱗を取り出した。そしてそれを、雲から顔を出した太陽に翳した。俺のなかにいつのまにか灯っていた狩人としての心は、紅蓮の鱗が発する輝きのように燃えていた。
「アンタ。」
　屋根の下には、フレントとアーミカが立っていた。
「俺たちを忘れたわけじゃないだろうな。」
　フレントが無邪気に白い歯を見せて言った。
「恩は返すよ。」
　アーミカはスリングショットの紐を振り回しながら言った。その口は不敵に微笑んでいる。目からは揺るぎない闘志のようなものをひしひしと感じる。
「聞かれちまったか。」
「あぁ、お前らがその気なら、もちろん手伝うぜ。」
　俺はこみ上げるように胸が熱くなった。屋根から飛び降り、改めてフレントとアーミカの顔を見た。
「ありがとう。」

対決！ドスランポス

「おはようアンタ。よく眠れたかい。」
サディがそう言って歩いてきていた。
「君は本当に空が好きなんだね。」
そう言って彼は笑窪を作った。彼は〝あの本〟を抱えていた。いつの間にかものすごい量の栞が閉じられていた。
「お前の方こそ、ずいぶん読み込んでるみたいだな。」
「まぁね。一文字もわからないけど。」
そう言って彼は、赤い栞が挟まったページを開いた。大きく描かれた一体のモンスターを中心に、無数のモンスターが所狭しと描かれている見開きのページだった。生態の分布図かと予想する俺に対して、サディはページの片隅に指差してこう言った。
「そうともとれるかもしれない。けど、もっと違うメッセージが込められているような気がしてならないんだ。」
サディの解釈は、中心のモンスターから周囲の生き物が逃げている、というものだった。確かによく見ると、全ての生物は中心に背を向けている。小さく描かれていた人類

も例外ではなかった。
サディは間違いなく、この本と今回の事件に関連性を疑っているに違いない。
「この事と関係があるって言いたいのか。」
「端的に言えば・・・ そういうことになる。」
サディはまるで告白するようにそう言った。俺の目を見た彼は、パッと本を閉じた。
「ごめん、忘れてくれ。飛躍しすぎた妄想だよこんなもの。あぁ恥ずかしい。」
忙しそうな手つきで鞄に本を仕舞い込んだ。
「いいじゃんか。別に違ったっていいだろ。」
俺は咄嗟にそう言った。森の奥に秘密があることは確かなことだ。そして何より、俺もその可能性を否定できなかったのだ。
「だとしたら、この本は終末の予言書かなにかかなぁ。」
サディは微笑の滲んだ表情で言った。
夏季の始まりを告げるような濃淡に富んだ空の中を、颯爽と雲が流れていく。森からやってきた白い鳥が、蕩々とその影を俺の前に落として行った。有明の月も、太陽も、妙に白かった。

碧色の空が白じろと輝き出した頃、俺たちは一本の大木の根に集まっていた。村の門

から少し離れた場所にある、森の入り口とも呼べる場所であった。
「ようし、一丁やってみようぜ。」
意気揚々とフレントは言った。彼はこの間よりも二回りほど大きな斧を持っていた。俺なら両手で扱うほどの代物であった。
「いいのかな…。こんな勝手に。」
大きな鞄を背負い、槍を持っていたサディが呟いた。
「今更なにビビってんだって。」
俺は右手に装備したオンボロの盾のベルトを締めて言った。そう、これらの装備は全て、自警団の小屋からお借りしたものなのである。早朝から忍びこんで、施錠されていた扉をあらかじめ強引に外しておいたのだ。
自警団とは言っても、俺らを含めた村の青年が加盟する形だけの組織だ。装備の倉庫の管理は実に粗末なものであった。
「まぁ、モンスターを追い払えば貸し借りなしか……。」
自信なさげに言ったサディは、鞄の中から深い緑色の液体が入った小さな瓶を取り出した。
「この回復薬を配っておくよ。怪我をしたら、患部に塗ってね。疲れてどうしようもない時に飲んでもいい。」

サディはそれを一人に二本づつ手渡した。
「美味しいの?」
アーミカがまじまじと回復薬を見つめて言った。
「残念だけど味は保証できない。アオキノコと薬草だからね。でも、効果は抜群さ。」
サディはそう言って虫かごを一つ取り出し、鞄を閉じた。
アオキノコと薬草を煎じることで出来上がる回復薬は、確かに不味いが上手に作れば効果は絶大だ。この村の商売の要にもなっている。
しかし調合にはそこそこの腕と知識が必要で、俺がやったら、間違いなくこんな綺麗な緑色は出せないだろう。
「君たちの分は・・・　想定外だったな。どうしよう。」
サディはアーミカの足元にいたメラルーたちを見て呟いた。彼らも今回の戦いに加わるという。彼らは草で編まれたポーチの中にいろいろ忍ばせているようで、薬草や干し肉などの食料がゴチャッと入っていた。
「留守番しててもいいんだぜ。」
「アイツラ、ユルサナイ。」
森に暮らす彼らなりに、なにか黙っていられないところがあるようである。俺たちはまさしく猫の手を借りて、森へと繰り出したのだった。

彼らはモンスターの気配にかなり敏感らしい。先行していくメラルーたちはお互いに謎のコミュニケーションをとりながら、俺たちを先導した。
「ここ、あたしがモンスターに襲われたところだ。」
アーミカがそう言ったのは、秘密の釣り場を経て歩き続け、大木が散らかる大きく開けた場所に出た時だった。
「やっぱり襲われたのか。」
ここは俺たちが痕跡と同時に奴等を発見した場所だった。サディの推理とは裏腹に、アーミカもここでドスランポスとドスファンゴと邂逅していたのだった。
「この辺までドスファンゴに追いかけ回されて、追い詰められた時にドスランポスが来たんだ。混乱に乗じて逃げた先で、この子たちとラブちゃんに出会った。」
俺たちはしばらくアーミカの話に度肝を抜かれていた。女の子が丸腰同然でドスファンゴに追い回されて、ドスランポスにも会って、よく無傷で済んだものだ。
「しかし、意外と静かなもんだな。」
フレントが言った。彼の言う通り、昨日まで森の中に渦巻いていた不穏な気配は、随分と大人しくなったような気がする。
「力のあるモンスターとはいっても、争いを好む訳じゃないですからね。」
サディはそう言いながら草むらを掻き分けてなにかを探していた。

争いの気配は既になくなっているものの、それはこの一帯がどちらかの縄張りになったことを暗示していることは明白だ。それを解っているのかメラルーたちも、真剣に周囲を嗅ぎ回っている。
「ニャー。」
探索をしていたメラルーの一匹がこちらを見て白い牙を見せた。
「チカクニ、イル。」
その言葉に一気に俺たちの中で緊張感が高まっていった。しかし、こうも揃って臨戦態勢を取れると、不安は全くない。
「どこでもいい。身を隠せ。」
俺たちはメラルーが自然と集まったところに身を寄せる。サディも遅ればせながら慌てて走り出した。彼の虫かごの中で、手のひらほどの虫がバチッと音を立てて短く光った。
「なんの気配だ…？」
「リョウホウ。」
メラルーは間髪入れずにそう言った。しかし、なんだか様子がおかしいという。その言葉を元に再び耳を研ぎ澄ますと、確かにゆっくりとした足音が近づいてきていた。
「いたいた…！」

確かにドスファンゴがゆっくりと歩いていた。しかし牙は欠け、傷が露わになるほどの状態になっていた。そしてそれを追ってきた三頭のランポスも姿を現した。

彼らは手負いのドスファンゴに向けて容赦ない攻撃を加え続けた。体の至る所に鉤爪や牙の跡をきざみこんでいく。瞬く間にドスファンゴは横転し、短く痙攣した後に息絶えてしまった。もう聴き慣れたランポスの遠吠えが、鼓膜をつついてきた。

彼らは縄張り争いに勝ったようだ。ボスがピンチになったブルファンゴたちは、既にここから離れているだろう。

「死ぬまで戦ったのか･･･ ?.なぜそんな･･。」

眉間にシワを寄せたサディが呟いた。

「ターゲットが絞れたな。仕掛けるか?」

既に額に汗を滲ませたフレントが言った。ここにきて思いの外緊張しているのか、早く身体を動かしたい様子だった。

「僕が彼らの目の前にこの光蟲を投げますから、目を瞑っていてくださいね。彼らの目が眩んでいるうちに、頑張りましょう。」

サディは慎重に光蟲が入った虫かごを持った。その瞬間からアーミカは蹲って顔を隠し始めた。

生唾を飲んだ彼は、見つからないように近づいていき、思い切り虫かごを投げつけた。

耳をつんざくような音と共に、閃光が俺たちの影を形作った。
「よぉしいくぞー！」
　木陰から乗り出し、よろけるランポスにここぞとばかりに体当たりをかました。倒れたランポスに向かって、フレントが豪快に戦斧を振り下ろしていく。木こりの斧とは段違いの威力だ。首を千切らんとばかりに、皮を破り、肉を断ち切っていく。瞬く間に鮮血が地面を紅に染め上げた。
「俺たちが致命傷を与えるから、止めは任せたぞ！」
　虫の息になったランポスに、サディやメラルーは止めを刺して行った。そうしてドスファンゴの死骸を取り巻いていた三頭のランポスは、あっという間に片付いてしまった。
　これが俺たちの経験した、最初の肉食モンスターの〝狩猟〟だった。しかしその達成を喜ぶ暇もなく、俺たちの前には、一頭の青き山賊が立ちはだかるのであった。
　血で目の縁を鮮やかに彩り、数々のブルファンゴの肉を裂いたであろう黒く染まった鉤爪を持ったドスランポス。欠けた後ろ足の鉤爪が、歴戦の猛者であることを物語っている。
「光蟲はあれだけなんだろ。」
「う、うん。」

俺は短剣を硬くにぎりしめ、盾を構えた。
「なら、真っ向からやるしかねぇな！」
「おうよ！みんな、俺には近づくなよ。斧を振り回すからな。」
ドスランポスは空に向かって吠えた。不気味な奇声を上げこちらを睨み付けるランポスに、アーミカが石ころを放ち、見事当てて見せた。
不意打ちに怯んだドスランポスに、フレントが体がしなるほどの勢いで斧を振り下ろした。その一撃は傷ついていたドスランポスの脚の表皮を大きく引き裂いた。
「いける！」
代わる代わる俺が踏み込み、患部に向けて短剣の刺突攻撃。短剣を深く刺し込み、一旦距離を取って二本目の短剣を鞘から抜いた。
よろけたドスランポスは俺とフレントをギョロっとした目つきで睨むと、引き裂かんと飛びかかってきた。
流石は猛者なだけあって、あの傷でもびくともしない。後ろ足の鉤爪は地面を深くえぐった。ドスランポスが爪を引き抜く間の隙に、俺はすかさず二本目の短剣を傷口に刺した。
飛びかかりは食らえばただでは済まないが、回避できれば大きな隙になるようだ。
フレントが弱点を作っていき、そこを攻撃してたくさん出血させれば、体力をみるみ

る奪っていくことができる。俺はそのためにドスランポスを挑発し、飛びかかりを誘発させようと試みた。

声を上げて威嚇をしては、距離を離していく。思惑通り、ドスランポスは高く跳躍すると、鉤爪を地面に突き立てた。

「隙だらけだ！」

上半身を目一杯使った戦斧の一撃が、またもやドスランポスの弱点を作り出した。かなり効果的な作戦だったが、相手はメラルーから知将とも評される頭脳を持つドスランポス。そう何度も同じ手は通用しなかった。

飛び上がったドスランポスを見た俺たちは反射的に隙を狙うが、奴は地面に滑らかに着地して見せたのだ。そして素早く身を翻しながら、背後に迫っていたフレントを尻尾で叩きつけた。

「ぶはっ！」

重い音と共にフレントが地面から足を浮かせて倒れた。ドスランポスは軽快な動きで俺に向き直ると、嘴を大きく開いて噛みつこうとしてきた。しかし奴が踏み込んだ瞬間に、謎の怯みを見せた。大きくよろけたドスランポスからは、血が流れ始めていた。

なんとアーミカが呼吸を荒らげながら、スリングショットを構えていたのであった。彼女が放ったハリの実は、見事にドスランポスの脇腹を抉っていたのである。

「アーミカ、スゴイ。」
よろめきながらもドスランポスは前足の鉤爪を一心不乱に振り回した。草葉は散り、低木の枝はたちまち折れて吹き飛んできた。俺は盾を構えてそれらを防いだ。
「グァッー・グゥアー・グォオオッッー・」
怒りが頂点に達したのか、ドスランポスは激しく吠え立てた。そして先程とは比べ物にならない機敏な動きを見せ始めた。並の人間の動体視力では捉えられない機動力をこの巨体で発揮している。
「気を付けろよー・攻撃を凌ぐぞ。」
俺はそう言って武器を構え、サディと背中を合わせた。アーミカは再びハリの実をスリングにかけながら、フレントの大きな背中に身を寄せていた。
ドスランポスは俺たちを撹乱するように、四方八方へと飛び回っている。目で追ってはいたものの、奴の強襲能力は圧倒的だった。
「きたぞー・」
俺たちに狙いを定めたドスランポスは、飛びかかってきた。サディと俺は咄嗟に身を投げ出し、攻撃を回避した。しかし、ドスランポスの狙いは外れてはいなかった。
身を切り返し、地面を這いつくばっていたサディに急接近したのである。
「うわあああ!」

ドスランポスはサディを拘束し、鉤爪を不適に光らせた。間に合わないと思ったその時、樹上から三つの黒い影が降ってきた。
「ニャー！」
メラルーたちがドスランポスの身体に張り付き、ステッキやピックアックスで引っ掻き回し始めたのだ。
「ココデ、アッタガ、ヒャクネンメ！カクゴセヨ！」
「ニャー!!」
予想外の奇襲にドスランポスはパニックになり、メラルーたちを引き離そうと暴れ回った。その間にも血はどんどん流れていく。
「サディ、怪我はないか。」
「うん。」
サディを起こすと、ドスランポスが暴れながら突っ込んできた。顔面にメラルーがくっついていた。
「ニャー！」
ドスランポスはそのまま樹木に衝突。落ちてくる葉や枝を浴びながら転んでしまった。メラルーたちも衝撃で派手にぶっ飛んでいった。
「今がチャンスだ！」

俺は残り一本の短剣をドスランポスの目に突き刺した。生々しい感触と共に鮮血が俺の手を赤く汚した。

ドスランポスは悲鳴を上げた。一瞬激しく暴れたが、すぐに大人しくなり始めた。やはり目への一撃は相当なダメージのようだ。俺はこの瞬間に勝ちを確信した。

「どうだ‥‥！」

俺たちはしばらくそのまま動かないでいた。ドスランポスはそのままぐったりと動かなくなった。サディが安堵のため息を漏らした。

「や‥‥　やった！」

アーミカの一言と同時に、今にも千切れそうな糸がとうとう切れてしまったように、緊張が解けていった。俺は振り返ってみんなの顔をみた。メラルーを除いて、喜びが爆発しそうな顔をしていた。そう、メラルーを除いては。それは俺たちがまたしても、知将の策略にハマっていたことを示唆していた。

ドスランポスは突然むくりと起き上がったのだ。

「アンタ！」

俺はサディの声に咄嗟に背後を振り向いた。そこには片目を潰された血塗れのドスランポスが、俺に向かって鉤爪を振り下ろそうとしていた。

俺は反射的に盾を構えた。岩でも降ってきたのかという程の衝撃を感じたその瞬間、

激痛が俺の腕を襲った。
「ぐっ!!」
ドスランポスの鋭い爪は、俺の装備していた木製の盾を突き破っていた。袖に生暖かく気持ち悪い感覚が広がっていく。
「ちくしょうっ」
俺は何も考えず、盾に刺さった鉤爪に短剣を突き立てた。無我夢中で放ったその一撃は鉤爪を砕き、俺はその勢いで尻餅をついた。
とうとう武器を失ったドスランポスは覚束ない足取りで踵を返すと、足を引きずりながら逃げ去ろうとした。
「逃すか･･･ っー!」
痛みを忘れていた俺はすかさずその後を追おうとした。
「どいて。」
アーミカが横からゆっくり現れると、再びスリングショットからハリの実を撃った。彼女が放ったそれはドスランポスの腱を穿った。飛び散る血飛沫と共に倒れた彼に、フレントが強烈な一撃を打ち込んだ。今度こそ力尽きたのか、三度動くことはなかった。
「今度は、仕留められたか。」
汚らわしい音を立てて斧を抜きとったフレントが、呼吸を荒らげて言った。

「ヨクヤッタ！ドスランポスニ、カッタ！」
「ニャー！」
メラルーたちは奇妙なステップを踏んで喜びを爆発させていた。
「やったぞ。俺たちが、村と森を守ったんだ。」
立ち上がろうとして煮えたぎるような腕の痛みに顔を歪ませると、サディが飛んできた。
「動かないで。ほら、僕の回復薬を飲むんだ。」
そう言って蓋を抜いた彼の分の回復薬を渡してきて、俺のポーチからもう一つ回復薬を取り出した。
「やったな。」
俺は回復薬を一気飲みし、サディにそう言葉を漏らした。
「すごいよ本当に。」
サディが俺の腕から慎重に盾を外して言った。裏側にはドスランポスが残した爪の鋒が突き出ていた。盾がなかったら、俺の腕は一体どうなっていただろう。
「俺たちには森の向こうに行く力がある。こいつは、それを証明してくれたんだ。そして示してくれたんだ。新しい生き方を。」
サディは回復薬を俺の腕に当てながら、どこか感慨に満ちた表情をしていた。

「決めたぞサディ。俺は〝モンスターハンター〟になるぞ。」
その言葉に、サディだけでなく全員が俺の顔を見た。
「なんだ?モンスター狩りでもしようってのか。」
フレントが勘弁して欲しそうな顔でそう言ってきた。
「違う。そんな単純なものじゃない。俺たちがこれから目指すべきものなんだ。」
訳のわからなそうな顔をするフレントとは対照的に、サディは満足げに微笑んでいた。
〝モンスターハンター〟、全ての命の調和をもたらし、それを制し、その中に生きる者。きっと、俺たちにはそうなれる力があるのだ。
俺は尻餅をついたまま、ふと森の奥に目をやった。木漏れ日の淡い光が、吹く風に揺られていた。

黒き凶風は突然に

街の騎士団が到着したのは、俺の腕の傷がすっかり癒えた時期の、夕方だった。
「本当に討伐したのか。一体誰が。」
討伐の証にと解体され、並べられたドスランポスの死骸を見た騎士が言った。茶色のおさげ髪の女性で、盾の紋章が縫い込まれた、綺麗な制服に身を包んでいた。
「この若者たちです。」
村長が俺たち四人を紹介した。そしてそのままことの経緯を説明し、即座にへこへこと謝り始めた。
「謝罪など無用です。払うものさえ払っていただければ。」
騎士は淡々と言った。騎士というより、傭兵のような口ぶりである。
「完全に無駄足ってことっすか?」
女騎士の一歩後ろに立っていた怒り肩の騎士の男がだるそうに言った。額にバンダナを巻いた怒り肩の、サディと同年代ほどの男だった。
「ここまで来た以上、お互い無駄足にはしたくないな。これから詳しく話を聞かせてもらう。一晩は世話になるぞ。」

そう言って女騎士は俺たちを鋭い目で一瞥し、村長に案内されて歩いて行った。
「なんか、怖い人だね。」

女騎士はフレイブと名乗った。彼女はコーバルトという部下を連れ、先遣隊の役割を担ってここに派遣されてきた下級の騎士だった。
「なるほど・・・。今回の一件は、それに関連性のある出来事が連なってのものであると。」
フレイブはそう言ってコップに注がれた茶を一口飲んだ。
「ええ。そして今回の一件もまた、鎖を形成する事象の一つに過ぎない可能性が高いのです。」
サディは少し早口気味に言った。フレイブはサディを氷の様な目で見たまま浅く相槌を打った。村長もサディの見解に同意を示していた。
「そう言える根拠は？」
「それをこれから見つけに行くんだ。」
問いかける彼女の横顔に俺は言い放った。剣の鋒のような視線が俺に向いた。フレイブは俺の右腕に巻かれた包帯を一目見て話し始めた。
「わかっている。しかし目処がなければ、我々も手の貸しようがない。」
彼女の言葉に、サディは一冊の本を徐に取り出した。あの謎の竜人語で著された本で

ある。彼は唐突に前に俺に見せてきたあのページを開いて話し始めた。
「どこか辺境の地で、この事象に似た何かが起きているとすれば…。モンスターがここまで押し寄せるのも頷けるかと…。」
フレイブはそれに適当に目をくれると、鼻でため息をついた。まぁ、当たり前の反応である。
一方で怒り肩のコーバルトは少し目を見開きながら、何も言わず遠巻きに本を見ていた。
「一応、明日に我々で近辺の調査をさせてもらう。君達にも同行を願いたい。村長、よろしいですね。」
村長から許可を得たフレイブは、集合時間と場所などを伝えてくると、コーバルトと共にキャンプまで帰っていった。
彼らの足音が聞こえなくなった頃、サディはガックリと肩を落とした。仕方のないことだ。あんなものをいきなり見せられて信じる奴なんていないだろう。かく言う俺たちだって、内容すらもわからない始末なのだから。
しかし、その信頼を裏付けるような出来事は絶対に、起き始めている。その目で見ない限りは、この本が何なのかは誰にもわからないのだ。
落ち込むサディとは裏腹に、俺はこの機会をチャンスと捉えていた。

「やるべきことの順序は見えてんだ。気を落とす必要なんてない。」
俺はそう言って彼らと別れた。

翌日の調査は、俺たちが大型モンスターと遭遇した時間帯から行われた。まだこの村に留まっていたメラルー達を集落に送り返すと同時に、周辺の状況についての聞き込み調査を行うというものだ。
彼らの集落は、秘密の釣り場に繋がる川をずっとずっと登ったさらに奥にあった。
俺たちはそこで休息をとりながら、人の言葉が話せるメラルー「トト」にサディの本を見せていた。すると彼らはしきりに一人の人物（？）の名前をあげた。
「〝アン〟、ナンデモ、シッテル。ワカラナイコト、〝アン〟ニ、キク。」
「アン？」
〝アン〟白い毛並みをもった一匹のアイルーらしい。トト曰く、彼女は物知りなアイルーで、西はシュレイド、東は遠く離れたシキの国までに及ぶほど、その知識は膨大なのだという。
「その〝アン〟はどこに行けば会える？」
俺はストレートに訊いた。しかし、
「ワカラナイ。」

トトはそう言った。彼女は神出鬼没の存在で、ふらりと集落に現れては、いつのまにかいなくなっているという。

サディと顔を見合わせた。既に俺はすっかり彼女のことしか頭になくなっていた。

「どうでもいい。今は周辺の状況を聞き出すんだ。」

早々に痺れを切らしたフレイブの言葉に肩を叩かれ、強引にポジションを奪われた。

「大型モンスターが出たそうだが、ほかになにか変わったことは?」

そう言ってフレイブは木のベンチに置いたインクボトルに、ちょびちょびと羽ペンを浸しはじめた。

トトは周辺のメラルーに聞き込みを行うと、それを淡々とフレイブに流した。なんでも、怪鳥イャンクックの死骸を見つけたのだという。その話を耳にした俺たちは、休憩も程々に集落を後にした。

メラルーたちに案内され、俺たちは集落からそこそこ離れた、森の中にぽっかりと開けた場所にやってきた。風に乗った薬草の匂いがめぐり、滝壺に落ちる水の音が響いていた。

「すごく心地のいい所だね。」

深呼吸するだけで、不思議とここまで歩いてきた疲れが癒されていく。先行していたメラルーたちが飛び跳ねている所を見ると、そこにはあの怪鳥が無残に力尽きていたの

だった。
　堅牢なはずの外殻に覆われた身体は、そこら中にこれでもかと傷が刻み込まれており、どす黒くなった血が桃色の甲殻を汚していた。更に耳はちぎれ、嘴は大きく欠けていた。
　確実に、何者かに狩られていたのである。
「火傷のような傷跡・・・。出血もひどいですね。」
　イャンクックの死骸を矯めつ眇めつ見ていたサディは独り言のように呟いた。
　俺は試しに持っていたナイフを外殻に振りかざしてみたが、全く刃が通らない。逆にナイフがへばってしまいそうだった。それを見たコーバルトも腰のサーベルを振ったが、同様に弾かれてしまっていた。
「こんな硬い甲殻をたやすく砕くなんて、大型モンスターにしかできないぜ。」
「あぁ、それもドスランポスなんか比較にならないほど強力なね・・・。一体誰が。」
　陸の女王、空の王者・・・、名だたるモンスターのシルエットが俺の頭を過った。死骸をまじまじと見つめていたアーミカも、ただならぬ気配を感じているような面持ちだった。
　しかも、この死骸は二日前にはなかったのだというから恐ろしい。彼を狩った者は、まだこの付近にいる可能性が高いのである。

それを耳にしたフレイブは、突然コーバルトにキャンプを構えろと言い出した。全員の視線が彼女に集まった。

「しばらく私たちはここで観測をさせてもらう。相手は大自然、いつなにが起こるかわからないからな。」

コーバルトは少し苦い顔をしながらも、それを承諾した。

なんて肝の座った女だ、そう思った。ただ、民を守るという大義に身を包んだ気高き騎士なのか、モンスターの力を侮っているただの阿保なのかはまだわからないが。

「んじゃ、しばらくここが拠点になる訳だ。」

俺はすぐにでも〝アン〟を探しに行くつもりでいた。トトに近隣にあるアイルーの集落を聞き出してあるのである。

村や騎士団へと調査の経過を報告するため、フレントやアーミカ、コーバルトは村に一時的に戻ることになった。結果的に、この場には俺とサディ、そして騎士のフレイブが残り、調査を続行する形になった。

近隣のアイルーの村を伺うという提案は、フレイブの同意を得るのに時間は要らなかった。理由は明白、彼女は森に対してあまりにも無知だったからだ。

トトの協力の元、俺たちはアイルーの村へと導かれ、彼らとの交流をすることができた。しかし、そこに〝アン〟はいなかった。だが、集落のアイルーは全員〝アン〟を

知っていた。
　集落にいたアイルーの一匹はこう言った。「彼女は月と太陽が一緒にいる時、そんな特別な時間に現れる。」と。
　トトもそう言って頷いていた。しかしどこに住んでいるかを訪ねても、彼らは知らないと言った。
「どうしても、彼女に会いたいんだ。」
「ナラ、ツキガミチタトキ、ソノトキマデ、ココニイロ。」
　トトはそう言った。次の満月までは、そう遠くはない。五回ほど夜を明かせば訪れるだろう。
「何を探してるんだ?」
　俺たちの様子を眺めていたフレイブが水を差し込むように言った。
「俺にもわからん。」
　俺はそう答えた。普通のアイルーを逸脱した生態を持つ彼女に、未だ真実味を得られていないからだ。
「アイルーの姿をした森の妖精かも。」
　サディは微笑しながら言った。それを聞いたフレイブは眉間にしわを寄せ、先程見つけた怪鳥の死骸について尋ねろとトトに言った。

彼らは驚きつつも、それに思い当たる出来事があったことをトトに向かって話し始めた。

やけにうるさい夜があったらしい。ドタバタと森を駆けずり回る足音や、奇声が森を震わせたのだそうだ。それも、耳が痛くなるほどの。

彼らはそれを〝黒き凶風〟と呼んでいた。血の臭いを運んでくるという、悪しき風。またの名を、〝イャンガルルガ〟と。

彼らは奴の襲来を悟っていた。幻級のモンスターだ。俺は震えた。

「だってよ、騎士さん。」

彼女の顔は至って冷静に見えた。しかし、瞳の動き方は決して穏やかではない。

「知っているのか…？その、イャンガルルガを。」

〝イャンガルルガ〟俺たちも本物を見たことはない。しかし異形のイャンクックが存在するという噂自体は、辺境に通ずる者の間では有名であった。紫黒の鱗を纏い、奇形の耳を持つという。尋常ならざる殺意を持ち、遭遇した者が血だるまになって見つかったという話さえある。

「本当に奴の仕業なのか。」

フレイブは言った。

「嫌でも疑うしかないですね。食べもせず、ただ命を奪うなんてことをするのは、噂に聞

くイャンガルルガならやりかねませんから。」
それともあの殺しになにか意図があるのか。それは実際に彼に訊いてみなければわからないことだ。まだまだ、調べることは沢山ありそうだ。
もし奴がいるのだとすれば、行動を読むことはほとんど不可能に近い。しかし普段は全く姿を見せないモンスター達が現れていることを鑑みれば、目的がある可能性の方が高いだろう。
すると一匹のアイルーがトトを通じて喋り出した。
「アヤシイ、バショ、アル。」
そう言ってトトとアイルーについていくと、アプトノスも悠々と登れそうなほどの巨木の幹でできた天然の展望台にたどり着いた。
俺たちの眼科に広がっていたのは、鬱蒼とした森林ではなく、まったく別の水系の川が悠々と横たわり、切り立つようにせり出た丘が目立つ草原地帯だった。思わず息を飲んでいると、アイルーはどこかを小さな手で示しはじめた。
彼の目線の先に立ってみると、突き出た丘の崖に空いた大きな洞窟が見えた。俺も同じところに指を刺して確認すると、彼は目を見て頷いた。
「あそこか…。みるからにモンスターの巣穴って感じだな。」
入り口は川に浸食されているものの、中に入れば陸地があるかもしれない。そうなれ

ばモンスターにとってはいい家になっていることだろう。
「どうやったら下に降りれるんだ。」
そう言うとアイルーは草原の入り口までの案内を快く承諾してくれた。
「い、いくのか。」
フレイブは若干声高になった。
「じゃここで観察しててくれ。サディ、お前はどうする?」
「行ってみる。夕方前だし、まだ大丈夫だろう。」
サディはそう言って背負っていた鞄のベルトを締めた。
「・・・ まてっ、民間人だけでは心配だ。」
気弱そうなサディの発言に少し矜持に火がついたのか、フレイブは慌ててメモにペンを走らせ、それをちぎるとトトに渡した。
「コーバルトはまた戻ってくる。君の集落に怒り肩の男が来たら渡してほしい。」
「遺書かい?」
急に彼女のおさげ髪が可愛らしくなって、少しからかってみると、明らかな殺意を含んだ視線が見事に飛んできた。
「斬られたいのか。」
「おっかね〜。」

俺は少し小走りになった。
「やめなよ・・・。」
こうして俺とサディ、騎士のフレイブの三人はアイルーに連れられて雄大な大地へと足を踏み入れた。そこで待ち受ける、予想外の脅威も知らずに。

電竜雷襲

村長の家を訪れた俺たちが目にしたのは、黄色い皺々の手紙に難しげに老眼鏡を当てる彼の姿だった。

「失礼します。ただいま経過報告にあがりました。」

俺の一声に村長は便箋を手元に置き、話すように言った。報告の内容は単純明快、新たなモンスターが近辺に現れていることだ。

俺はまた顔を引きつらせる村長を想像したが、彼の反応は比較的落ち着いていた。

発見されているモンスターは、素人の俺から見てもわかるくらい、階段上に危険度が増加している。ランゴスタの大量発生やランポスの襲撃、ドスランポスとドスファンゴの出現、そしてイャンクックの死骸。

「やつが死骸で見つかった以上、それ以上に強いモンスターが近くを縄張りにしている可能性が高いわけだ。」

ベラベラとあの少年の受け売りを話すフレントに、村長は唸った。

「うむ、引き続き調査を頼んだぞ。くれぐれも、無理はするな。コーバルト殿、よろしく頼みますぞ。」

「ハッ！」
村長はそう言うと、街から届いている行動の指針や補助の案内などの資料にせっせと目を通し始めた。
「それと村長。森の奥にまたランゴスタが現れ始めています。くれぐれもご注意ください。」
帰り道で嫌と言うほど不愉快な羽音を聞いたことを思い出した俺は、帰り際にそれを伝えた。村長は、何も言わずに親指を上に立てた。
もう日が暮れ始めていたため、明日の出発を前に俺たちは夜を村で明かすことにした。
その晩、俺はアーミカとフレントの兄妹に連れられて小くて小汚い屋台に座った。街でも珍しいくらいの美人のお姉さんが経営する屋台だった。メニューは、二種類しかなかった。
「ごめなさいね。ご迷惑をおかけして。」
「いえいえ、仕事ですから。」
彼女はイアと名乗った。フレント曰く、村長の娘さんなのだという。オススメを頼むと、地元で採れたお米とアプトノスの肉が乗っかったどんぶりが勢いよく出てきた。
「お代は結構です。私からのお礼です。」

彼女は愛嬌たっぷりの微笑みを浮かべて言った。
「あ、ありがとうございます。いただきます。」
美味い。普通に美味い。俺はこの時、はじめてこの仕事を受けて良かったと思った。正直あの先輩と二人でこんな辺境まで長旅してモンスターと戦う仕事とか本当に行く前から鬱になりそうだったが、彼女との出会いでそれは全て吹き飛んだ。
「コーバルトさんはあの騎士さんとどんな関係なのさ。」
俺に向かって、アーミカが急に聞いてきた。
「ただの先輩。」
フレイブは同じ職場の先輩で、俺よりも五年ほど経験が長い。父は名のある騎士だそうで、彼女もそんな道を志していた。
しかしながら、そもそも優秀な俺たちが騎士であるのであれば、こんなクソみたいな仕事なんか回ってこない。それでも、誰かがやらなくちゃいけない仕事だから、こうして俺たちがやっている。
「てか騎士さんって普段なにしてんの?」
「まぁ、騎士なんてカッコつけてるのは、主の趣味だよ。この制服もね。実際は自警団みたいなもんさ。仕事がない時は畑だって耕してる。」
「変なの。」

アーミカの興味なさげな反応に鼻から笑いを溢しながら、米粒ひとつなくなったどんぶりをイアに返した。
「なんだそれ、不安になってきたぞ。本当に応援をよこしてくれんだろうな。」
フレントが眉を潜めて言った。
「心配はいらない。もう少し具体的な調査の成果があれば、動いてくれるだろう。だから、もう少しだけ力を貸して欲しい。」
そう言うと、フレントは力強い笑みを浮かべて俺の怒り肩を叩いた。我ながら、嘘がうまいと思った。

どこまでも青く広がる大空、いつか見た大海原とそっくりだ。ここまで横に長い空を見渡したのはいつぶりだろうか。
俺とサディはキョロキョロと新天地を見渡しながら、会話もなく歩いていた。すると、その沈黙を破ってフレイブが口を開いた。
「そう言えば、君が持っていた本。あれはなんだ？」
「え？」
彼女の口から飛び出たのは、サディの持っている謎の本についてだった。会話に遠慮

がちなサディに、フレイブはしつこく説明を要求した。
「私の知り合いに、竜人族に詳しい奴がいるんだ。賢いし、なにかわかるかもしれない。調査が終わったら、私に預けてみないか。」
興味なさげな態度を取られてしょげていたサディは、一転して明るい顔になった。
「どんなやつなんだ。」
サディが頷く前に俺は質問をねじ込んだ。
「竜人族に詳しいといっても、そいつ自身も竜人族なんだ。というか・・・ん?」
そう言いながらフレイブは突然、俺の顔をマジマジと見つめて唸り出した。
「んだよ。」
「お前によく顔が似てるような・・・。」
その瞬間俺はそれまで抱いていた疑いの気持ちが一気になくなった。
「もしやそいつって。」
そこまで言いかけたとき、サディが険しい顔つきで唇に人差し指を当てた。
黙って耳を済ませていると、聞いたこともない重低音が耳を震わせた。大気を力強くかき分け、滑空する音である。
「おい、あれ。」
フレイブが我先にと身を低くして言った。あっという間に土埃を巻き上げ、雑草を蹴

散らしながら着地したのは、イャンクックだった。
「もう一頭いたのか。」
　この個体の腹部をよく見ると、あの時の死骸にはなかった暖かそうな羽毛に包まれている。
「クックファーだ・・！」
「クックファー?」
　雌のイャンクックが持っていると言われる超高級な羽毛だ。手に入れることは大変難しく、高額で取引される。
　援助の要請にかかった費用も余裕を持って賄うことができるだろう。
「きっと既に死んでいたあの個体と番なんだ。この付近に巣を作っているのかもしれない。」
「欲しいな・・・！クックファー。」
　冷静に分析を始めるサディを横目に俺はそう呟いた。
「馬鹿言っちゃいけないよ。繁殖期の動物の雌は常に気が立ってる。普通のイャンクックよりも危険だ。」
　サディが急に早口になった。そしてはなし終わった後に慌てて自分で口を塞いだ。思ったより声が出てしまったのだ。

基本臆病なイャンクックの地獄耳にとって、静かな草原での俺たちの話し声は丸聞こえだった。イャンクックは長い首を上にあげ、草原を見下ろしていた。
「・・・・。」
そして生唾を飲んだ瞬間、イャンクックは俺たちを捉え、大きな耳を開いて突進してきた。
「逃げろっ。」
伏せていた俺たちはすぐに起き上がり、四方八方へと逃げ出した。
イャンクックは四散した俺たちのいた場所を豪快にコケながら駆け抜けた。すぐにムクリと器用に起き上がると、ジャンプしながらこちらを振り返った。
「やれやれ・・・　！」
俺は盾を構え、短剣を一本抜いた。イャンクックは首を震わせながら力強く威嚇している。
「私の後ろにつけ。森まで時間を稼ぐ。」
フレイブは腰に刺していた立派な剣を抜くと、俺の前に出た。
「ごめんなさい！僕のせいで・・・」
「うるさいっ、さっさと逃げろ。」
パニックになるサディにフレイブが怒鳴り散らした。イャンクックは口から火を溢

しながら、急に突進を始めた。
すぐに横に退避し、様子を伺う。相当怒っているようだ。突進の勢いで倒れながらもすぐに起き上がり、次の行動に出た。
「うわぁっ」
イャンクックは俺とフレイブに向かって口から炎の玉を吐き出した。しかし動作が大振りすぎる故か、正確に狙ってくるというよりは適当に撒き散らしているだけだ。
「化け物め・・・！」
火球飛ばしを隙と捉えたフレイブは、咄嗟にイャンクックの足元を狙いに走った。
彼女はその勢いのまま縦にまっすぐ剣を振り下ろした。俺たちには真似できない、素早い動きだ。
「!?」
確かにフレイブは剣を振り切った。しかし、彼女の刃は、宙を舞っていた。
その直後、イャンクックは尻尾をしならせてフレイブを打った。
「ぐはっ！」
「フレイブ！」
フレイブは吹っ飛ばされた衝撃で、イャンクックの体長にして二頭分は離れていただろう俺のところまで転がってきた。

俺に支えられ、咳き込みながら立ち上がったフレイブは、柄だけになった剣を見て絶句した。

その間にもイヤンクックは容赦なく攻撃に出た。乱暴に火球を撒き散らしながら当てもなく走り回ったのである。

すぐに動き出せなかったフレイブの背中を押しながら、なんとか脱出を試みた。

「数撃ちゃ当たるってか‥!?」

そう言った瞬間、俺とフレイブの目の前に火球が炸裂した。液体のような物が燃えていた。もし当たってしまえば、服を脱ぎ捨てないと火は消えないだろう。

「くそっ」

尻餅をついていた俺たちに向かって、イヤンクックはその嘴を突き立てようとしていた。覚悟したその瞬間、耳を裂くような高い爆発音が鼓膜を叩いた。それと同時にイヤンクックは、瞬く間に飛び上がって逃げ出していった。

「間に合った‥!」

駆けつけてきたのは、何匹かアイルーを連れたサディだった。片腕に小さなタルを抱えていた。

「何をしたんだ。」

「アイルーたちが作った爆弾だよ。怯ませられないかと思ってね。」

彼らが持っていたのは、小さなタルに火薬を詰めたお手製の爆弾だった。
「イャンクックは聴覚に優れたモンスターだ。探知能力に優れる反面、それは弱点でもある。」
サディは汗を拭いながらいつものようにペラペラとモンスター解説を始めた。アイルーたちは去っていくイャンクックに向かって威勢よく何かを叫んでいた。
「またお前に救われちまったな。」
俺はサディにそう言った。
「僕じゃない。彼らの知恵あってこそだ。」
彼の殊勝さが、俺には少し歯痒いところだ。サディは粉々になったフレイブの剣に目をやった。
「くっ・・・。」
鞘にも収まらず、情けなく残った剣の柄をフレイブは何処にしまうでもなく、ただ持っていた。
「イャンクックの甲殻は、鉄製武器では歯が立たなそうですね。」
サディの言葉にフレイブは振り向いた。今回の遭遇でそれは明白になった事実だ。彼女の持っていた剣は、対人用ではあるが立派な鉄製品。モンスター用の大きな代物であったとしてもその効果は薄いだろう。

「くそっ」
フレイブは壊れた剣を地面に投げつけた。
「すごい力だったな。予想以上の硬さだったはずなのに、弾かれずに振り切るとは・・・。」
俺は唇を噛むフレイブに言った。あの光景は凄まじかった。フレント並みの怪力の持ち主かもしれない。
「剣が脆かっただけだ。」
聞くなりそう吐き捨てたフレイブは、打ちつけた箇所をさすりながら腰を上げた。
調査を続行したいところだったが、フレイブの負傷や、雨が降り始めてきたこともあり、キャンプへと引き返すことにした。
しかし、大自然の洗礼は、まだ終わってはいなかった。歩き始めた途端、再びあの重低音が雨音に混じりながら俺たちに向かって迫ってきたのだ。
「追い払ったんじゃなかったのかっ！」
フレイブが叫んだ。
「やはり巣の近くなんだ・・・！取り返しにやってきたんです。」
サディはアイルーと共にいそいそと爆弾を準備した。しかし、火薬が湿気ってうまく着火ができないようだった。
「お前ら、フレイブを！」

俺はそう言って短剣を抜いた。イャンクックがサディたちに狙いを定める前に、注意を引きつけなければならなかった。

俺たちを取り巻くように旋回しながら着地したイャンクックは、俺を遥かに凌駕するその巨体を使い、地団駄を踏んで怒りを爆発させていた。相変わらず馬鹿みたいな顔をしているが、感じる殺気は凄まじいものがあった。

「安心しな・・・。お前になんか、はなっから勝てやしねぇんだからよ。」

無意識にそう呟いていた俺は、大声や盾を叩く音でイャンクックを挑発した。

「キュアアアアア！」

奇声を発したイャンクックは、がむしゃらに首を振り乱しながら、全身を投げ打つように突進してきた。

突進を避けられたイャンクックはすぐさま起き上がると、彼女の体長にして二頭分はあろう距離を軽々飛び越えて急接近してきた。

「あぶねぇっ。」

嘴で叩き潰そうとしてきたのだ。イャンクックの股下をすり抜けることで回避した。彼女の足元には俺の膝が埋まるぐらいの深さの穴がいくつも穿たれていた。

嘴に付着した土を払い除けるように身を翻したイャンクックは、矢継ぎ早に攻撃を仕掛けてきた。

「大事なクックファーが汚れちまうぞっ」
嘴が地面に深く刺さり、抜くのに苦労している隙に、俺は短剣を耳に突き刺し、そのまま縦に引き裂いた。
イャンクックが悲鳴と共によろけた。それでも攻撃の手は一切緩むことはない。口から火の玉を吐き出し、俺の足元を燃やしてきた。その炎は、雨に打たれても消えることはなかった。
「マジかよっ！」
逃げ場がなかった。ジリジリ迫ってくる火を飛び越える決断をする暇さえもなかった。雷鳴と共に、イャンクックが突進しようと地面を蹴った。
「!?」
雷鳴は、幾筋もの緑色の閃光と共に、イャンクックを黒く照らした。しかしその音は、空気を切り裂く雷にも似た、雄叫びであった。
「ギシシャアアアアアアアア！」
俺が気を失う直前に見たもの、それは吹き飛ぶイャンクックと俺の間を迸る電光の中で、一際光る一頭の大きな飛竜だった。